
I S — R ・ G ・ S —

黒条非日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS — R・G・S —

【Nコード】

N3781S

【作者名】

黒条非日

【あらすじ】

これは最速を求める男の物語だ。

1. プロローグ（前書き）

えー、どうも此所では初投稿になります。

まあ、お目汚しかも知れませんが楽しんでくれれば幸い。

あとアルカディアの方にも投稿させて頂いております。

パクリなどではないのでご安心を。

ではどうぞ。

1. プロローグ

さて、この物語を始めるに至って、俺は果たしてどの場面から話を始めるべきなのだろうか。

インフィニット・ストラトス

ISという世界最強の兵器が世の中に出現した時の驚愕？

ああ、それは驚いた。驚いたとも。ゲームの中にしか存在しなかったような存在が目の前に現れればそりゃあ、驚くしかないってモンだ。

——だけど、そこじゃあない。

女しか乗れないはずのISに自分が乗れた時の驚愕か？

驚きこそしたが、それには心当たりがないでもない。まあ、それにしたって実際は口を間抜けに開けて呆けちまう程の衝撃は存在した

し、その後の試験の時も驚かされた。目の前で対戦相手がずっとけりゃ、ビックリもするってモンだ。ましてやそれが乗り慣れているはずの人間だってんだから一塩だ。

——だが、ここでもない。

それともそれとも、俺の前に専用機が届いた時の驚愕か？

確かに驚いてはいたが、この時に関しては歓喜の方が大きかっただろう。

昔、昔、夢に見た憧れの存在。琴線を刺激するような有り得ない程クールなフォルム！

いやあ、感動だったね。思わず声が漏れちまうくらいには。

——しかし、これもちよっと違う。

——そう、話すのならば俺の原初。初めての、俺の小さな世界を揺るがす程の驚愕から俺は話すべきなのだろう。

人にとっては取るに足らないようで、しかし俺の、いや今となっては世界的にも衝撃的な出来事なのかも知れない。

たかだか小学校の時分の話だ。親友とその嫁（誰一人として認めてはいないが）と友達だった俺が出会った世界最高、いや唯一オンリーワンの頭脳を持つ、世界有数の変態で変人の話から俺は物語を始めるべきなのだろう。

篠ノ之束。俺は彼女になおちなどと呼ばれてはいるのだが、実はこれは驚くべき事態だ。

この彼女というのがとんでもない人格破綻者で、身内と一部の人間以外には驚くべき程関心がない。人の名前を憶えるなんてのは稀も稀。そもそも興味の無い人間に脳の要領を取られるのなんて御免だとも言わんばかりに憶える気が全くない。

まあ、俺も例に漏れず、ある時までは彼女に名前を呼ばれるどころか、遭遇さえしたことがないなんてそんな有様だった。

ある意味、イベント配信しかされないレアな伝説のモンスターなんて目じゃない程だ。

彼女はイベント配信さえされやしない。伝説も伝説、都市伝説になっても良いようなそんな存在に何故、俺が名前なんて物と呼ばれるまでに至ったか、なのだが……。

これが何とも情けない話ではあるのだが、別に人間性でもなんでもなければ、俺になにか特異な能力があったわけでもない。彼女の興味を惹く物なんか俺はこの身に一つとして持つてはいなかった。イジメを見れば傍観者を気取り、義憤に身を窺したこともないそんな平凡な少年に彼女がどんな興味を惹かれるというのだろうか。

そんな彼女と俺は如何にして縁を結んだか、と問われれば。これまた情けなさ過ぎて涙が出そうなのだが、趣味の一致とえばまだマシな方だろう。もっと端的に言うのなら……。

——アニメの御陰だ。

まあ、かったるい話をとろとろと続けるのは俺の信条に合わないのだが少しばかりお付き合い願おうか。

これは俺、くがなおみち久我直道の物語だ。

ある日のことだった。

俺、久我直道は子供としては当たり前のように、自分の好きな物を友達と共有したいとそんなことを思いつつ、自分の好きなアニメのDVDを持って友の家へと急いでいた。

そしてその友達、織斑一夏の家へと行ってみれば――。

「……いない」

いくら呼び鈴を鳴らしても誰も出てきやしない。蝉の鳴く声だけが無情に響く中、じゃあ嫁のところだろう、と俺は大して気落ちすることもなく一夏の嫁（こう呼ぶと本人は顔を真っ赤にして否定するのだが。竹刀付きで）篠ノ之箒の家へと向かった。

彼女もまた、俺の友達なのだからこの大好きなアニメを見せることに何の躊躇いがあるうかという物だ。

走って走って、そう短くない時間をクラスの中でも一番速い足で駆けつけて、篠ノ之の家へと到着した。

「御免ね。まだ二人とも帰ってきてないの。でももうすぐ帰ってくると思うから中で待ってるといいわ」

「はい」

二人はまだ帰っていなかった。一体どこでいちゃいちゃにやんやんしているのかと少しばかり憤りを覚えたが、しかし俺は寛大な子供だった上に、夫婦水入らずを邪魔する程空気の読めない子供ではなかったので、大人しく家の中で待っていることにした。

ただ待っているのも暇なので、篠ノ之母に許可を貰い、一足先にアニメを鑑賞していることにする。

画面の中で繰り広げられる、熱く格好良い戦闘。

子供心に憧れを憶え、そして敬意を感じる。

彼らは何故こんなにも強くあれるのだろう、何故こんなにも諦めることなく壁に向かっていけるのだろう、何故こんなにも――。

「……なに見てるの？」

びくり、と。

いきなり掛けられた声に肩を跳ね上げる。
今まで聞いたことのない声だったこともその挙動に拍車をかけた。
この家で聞き覚えのある声は、一夏と筭そしてその母親と偶に見る
父親くらい。

聞こえてきた声はそのどれとも違っていた。
振り向けば、そこにいるのは見たこともない少女だった。
歳は幾分か上だろうか、綺麗な、可愛い少女だった。ただそれ
も見たことがないと言うその一点だけで俺の動きを止めるのには充
分に過ぎたわけだが。

「なに見てるの？」

「あ、アニメ……」

「……ふーん」

不審者が二度目の問いかけを俺に寄越す。どもりながら俺は何とか
言葉を返したが、どもったのはなにも彼女が不審者だから恐かった
わけではない。……いや、勿論ガキである俺にはそれだけで恐怖す
るには理由が揃っていたわけではあるが。

何よりも恐かったのはその眼だ。

あの頃は何とも表現しにくかったが、充分に育った今なら説明できる。

あの時、彼女が俺に向けていた眼はまるで――。

――路傍の石を見るような。

――死にかけて蟻を見るような。

――道端に捨てられた空き缶を見るような。

――遊び飽きた玩具を眺めるような。

どうしたらあそこまで無機質な、まるで全く完全に俺――いや世界とすべきだろうか？――と言う存在に興味のない眼を向けられるのか、俺には未だに分からない。まあ、あの頃から彼女という存在は異端で異質で、それでいて異常だった。

そんな眼を俺に向けておいて、彼女はポスリと俺の隣に座り込んだ。
無言。

静寂と言うにはいささか目の前のテレビが煩すぎたが、しかしその場の空気は嫌に緊張感に満ちていたのを憶えている。

妙なプレッシャーに晒されながら、俺は文字通り現実から逃避を果

たす為に目の前に映し出される世界に意識を集中させた。

知らない少女とアニメと一緒に——一緒にと言うには彼女と俺の世界は隔離されすぎていたが——見始めて数分。初めて彼女がアクションを起こした。

俺の前に転がっているテレビのリモコンを取ると、彼女はいきなり巻き戻しをかけ始めた。

「——あっ」

俺の驚きを意に介すこともなく、彼女はそのアニメを一番最初まで巻き戻した。

再び始まるオープニング。

……文句などあの頃の俺に言えるわけもない。あれは苦行だ。拷問だ。何故好きなアニメを見るのにあんなに胃が痛くなる程のプレッシャーをかけられなければならないのか。

まあ、何度も見ているアニメをもう一度見ること自体は別に苦痛でもなんでもなかったのは確かでもあった。

速くこの少女が何処かに行かないだろうか、なんてそんな淡い希望を持ちながら再び上映会は始まった。

——それから一時間後。

「……これ、面白いね」

「えっ!？ あ、そ、そうですね……?」

一卷を見終わって、彼女から唐突に掛けられた声に思わず疑問型で返す。

まさか一時間なにも話さず無言だった彼女がいきなり声を掛けてくるなんて誰が予想出来ようか。

「続きはあるのかな？」

「あ、あるけど持ってきてないです……」

「ふーん。……君、名前は？」

「え、あ、えっと。く、くがなおみち……」

「じゃあ、なおみちだ」

「な、なおみち？」

「うん」

一体、何が琴線に触れたのか。先程まで蚤ほどの興味すら俺に抱い

ていなかった少女はいきなり親しげに俺に話しかけてきた。
戸惑う俺に構うことなく、妙なあだ名までつける始末。

戸惑った、大いに戸惑ったね。いきなりなんだって言うんだ、ってな。

その時だった。救いの女神（既婚）が現れたのは。

「ね、姉さん！？　な、直道と喋っている、だと……？」

「は？」

「あー！　お帰り、箒ちゃん！」

聞き慣れた声に振り向けば、そこには友達の篠ノ之箒が愕然と、まるでツチノコでも見たような表情を浮かべて立ち尽くしていた。
と言うか、姉さん？　姉？　Why？

状況が理解できなかった。誰が誰の姉さんなのか。終ぞ篠ノ之家にもう一人子供がいるなんて情報を俺は寡聞にして聞いたことはなかったのだから。

「一体何をした、直道！」

「え、俺怒られんの？」

鬼、と言っでは失礼だろうがまさしくそんな表情で駆け寄ってきた
箒に俺は呆然としながらそんな言葉が口を突いた。

「あ、す、済まない。と、ところで今日はどうしたのだ？」

「いや、一夏と箒と遊ぼうかなって思って」

「む。そうだったのか……。済まないことをしたな、一夏ももう帰
ってしまったし」

「いや、いいよ。俺も今日はもうなんか疲れたし帰る……」

「そうか。気をつけて帰れよ。……って違う！ お前、姉さんど
うやって——！？」

「うん？ 帰るの、なおっち？」

「ああ、えっと……。はい」

話しかけてきた篠ノ之姉（暫定）に何とか言葉を返す。疲れの大本はこの人なのだがそこを追求する気すら湧いてこない。

「そっかー。じゃあ、明日この続きよろしくね！」

「はいい!？」

「よろしくね！」

「……はい」

否定すらさせない勢いに押されて、しょうがなくそれだけ返す。満面の笑みは可愛らしく、それでいて有無を言わせない力強さがあった。

「そう言えば自己紹介してなかったねー。私の名前は篠ノ之束。宇宙最高の美少女だよ！ 束さんって呼んでも良いよ！」

「はあ。了解です」

「うん。素直なことはいいいことだね！ それじゃ、また明日！」

そのまま玄関までご送迎。

何となく痛い胃と、疲れによって石のように重たい足を引きずって俺は家路についた。

……玄関まで出て俺を見送る姉を見て、いつもの凛々しい顔を驚愕の表情へと崩し、あんぐりと口を間抜けに開けている筈の顔が嫌に印象に残っていた。

それから一週間程だろうか。

まるで女王に貢ぎ物を持って行く民衆のように、俺は足繁く篠ノ之家に通い続けほぼ毎日のようにアニメを篠ノ之姉である束さんと見続けていた。

――で。

「終わっちゃたねー」

「そうですねー」

何事にも終わりはある。それが物語なら尚のこと。
遂に最終回に至ったアニメを見ながら、俺と束さんは感慨深げにそ
う呟いていた。

「なおっちは誰が一番格好良かったと思うー？」

「それ、聞く意味あるんですか？」

「あはは。愚問だったかな？ そうだね、こんな下らない質問をす
るなんて超天才美少女束さん一生の不覚だね」

そう、愚問だ。

俺と束さんはこのアニメを見る上での感性という点だけでは、非情
に似通っていたと言ってもいい。

惹かれたのは不条理を打ち砕く黄金の獣でも、全ての影／悪を絶つ
刃のような信念でもなかった。

惹かれたのはただ一人の愚直な男。

不器用で、優しく、道化を演じながらも美味しいところをかつさ
らうそんな男。

自分の心情を最期まで守りきり、そして死んでいった最高に格好い
い男。

直道。自分の名前の意味を初めて考えた。考えさせられた。真っ直ぐな男でありたいと思う。人を守る男でありたいと思う。人生という名の道を曲がらずに走れる、そんな男でありたいと初めて思った。

「……ねえ、なおっちは今の世界は楽しい？」

唐突な質問だった。俺は特に何を考える出もなく反射的にその言葉に答えを返した。

「そんな難しいこと、分かんないですよ」

「じゃあ、あの人みたいになりたいと思う？」

あの人、それが何を指すかなんてことは聞かなくても分かった。だから俺は、すぐにその答えを出した。

「なりたい」

「わあ、即答だ」

その時、俺は初めて彼女が俺自身に向けた笑顔を見た。

——と、まあ、此所までがプロローグだ。ここから世界は急激に変化を見せたってわけ。
ここからは俺の信条に従って、さっさと話を進めていこうか。

数年後。華々しいデビューを飾って世界にISなんてものが登場した。

世界を驚かせ、震え上がらせるものをあの天才は作り上げた。

それは俺の理想にその時点では一番近いものだった。だからこそ驚愕して、驚喜して、そして絶望した。

だってその兵器には——。

——女の子しか乗れないんだから。

彼女に宣誓したあの日から、ずっと俺は追い求めている。
ずっとずっと、それだけを愚直に。

しかし、なにかが足りない。

自転車——全然足りない

車——まだまだ足りない。

バイク——こんなものじゃない。

戦闘機——それなりに近くはあったが、しかし足りない。

尊敬して、敬愛するあの人が見た景色はきっとこんなものじゃない。

IS——近い。けどもつとだ。まだたり得ない。

足りないものそれは情熱か？ 気品か？ 思想か理念か鮮烈さか？

それともそれとも？

何よりも俺が追い求めるものが足りていない。それは——。

更に数年後。

今や親友まで格上げされた友達。織斑一夏と共に来た試験会場。目の前に佇むIS。

一体何なのか、乗れるはずもないものに乗ることが試験内容なのか。困惑する思考の中、隣の一夏は何故か乗れないはずのISに乗り込んでいて。

つられるように俺も並ぶそれに触れた。

体中を奇妙な感覚が通り抜けたと思った瞬間には、何故か俺もそれに乗り込んでいた。

感じたことのない全能感。溢れる脳内麻薬。クスリでも決めたかのような有り得ない程の昂揚感。

そして戦闘試験。

俺の熱は急速に冷めていていた。

全能？ この程度で？

昂揚？ これぐらいで？

脳内麻薬？ 出るわけもない。すでに止まった。

おいおいおいおい、なんだこれは？ と脳内で不満が喚き散らす。
訓練機とはいえ、あの人が作ったものがこんなもんかなんて、勝手に失望する。
足りない、足りない、足りなすぎる。
力、能力、機能、柔軟さ。
そして何より――。

IS学園。

何が何だかしらに内にこんな訳の分からない学校に入れさせられて。
まるで鑑賞動物のような惨めな気分を味わいながら、横の女のかつたるい口上を聞き続ける。

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――！」

ああ、煩い。煩わしい。

ISに乗るこいつは、どこの国の人間がISを作ったのかすっかり

忘れているらしい。

恩恵に預かっているのはどのどいつだと、そう言う話。

横目に一夏を見てみれば、すでに切れる二秒前。

コイツに先に切れさせてなるものか。誰よりも前に行くところそ我が誇りだというのに。

それにそろそろ俺自身もこのお話には飽きてきたところだ。

「あゝ、やだやだ、文化を知らないヤツは。黙れよ。コロネ頭」

「はあ!？ わたくしのことをおっしゃてますの!？」

「テメエ以外に誰がいるっつーんだよ」

教室から漏れる忍び笑い。我ながら自分のセンスには脱帽だ。人を貶めると言うことと、ある一点に関しては他の追隨を許す気は無い。置き去りだ。

「言うに事欠いて人の頭を菓子パン呼ばわりなんて、聞き捨てなりませんわ!」

「だったら一生抱えてろ」

「――ッ！ 決闘ですわ！」

目の前に佇む俺の専用機。

『それが久我くんの専用 I S 『R・G・S』です！』

そう、この『相棒』を見た時の俺の気持ちをなんと表現すればいいのだろうか。

感動？ 生温い。

歓喜？ まだ足りない。

狂喜？　これだ。

何時かの夢が目の前に顕現した瞬間。

今までの人生で一番嬉しい出来事。そう言っても過言ではないし、これから先これ以上はないだろうと断言できた。
だがしかし、形だけだ。

俺はあの人にはまだ届かない。どうしようもなく遠いと未だにそう感じる。

だけど、形から入るってことは大事なことだ。それは人を真似ることでありながら、何れそれを超えるという確かな信念を感じさせる行為でもある。

そう、俺はここから始まる。

偉大なる先人越え。超えられるかどうかは知らない。相手は幻想の人間だからだ。

誰も超えたことを証明してはくれないし、俺が彼を超えたと自分自身でそう感じられるまでにならないければ、彼を超えたことにはならない、出来ない。

魂という名の原動機エンジンを叩き起こす。

体中を巡る血／燃料に火をつける。

体躯に行き渡る、熱情と熱量。だが足りない。足りなすぎる。

俺に足りないもの、それはあらゆるものだ。それは自分が一番分かっている。

中でも一番足りないもの。それはもしかしたらこの目の前に佇む相棒が補ってくれるのかも知れない。

そう、その足りないもの、それは何より――。

セシリア・オルコット。その前に^{ファーストシフト}第一次形態移行を済ませた俺のISが立っている。^{フル・スキ}

今時珍しい^{フル・スキ}全身装甲。一部の隙間もなくその全身をISが覆っている。

しかし、その外装はゴツゴツとした鎧めいたものではない。

タイツのような材質の分からない物に覆われた袖や腹。手には丸み

を帯びた手甲が装備され、全体的に流線型をモチーフにしたようなイメージ。
赤紫色のバイザーに覆われた顔は窺うことが出来ない。
そして何よりも異様なのはその足だ。

飛ぶことを前提としたその兵器にそんなしつかりした足は要らないはずなのにも関わらず、それには人間のしつかりとした二本足がついている。

武装もなにもない、極限まで細身に作ったかのようなスタイリッシュな形状。

そんな姿に目を奪われながらも、セシリアはそんな自分を誤魔化すように声を上げた。

「ふん！ 形態移行したのは結構ですがそれ、飛べるんですの？」

確かに俺のISは飛べるような機能はどこにも有していないように見えるが、PICは装備されているし飛ぶ事自体は可能だ。

——しかしこれは飛ぶ為のものではない。跳ぶ為のものだ。
そしてこの二つの足はただ走る為だけにある。

「ご託はいい。さっさときやがれ」

俺の言葉を皮切りに、青い雪のビツトが光条を吐き出す。

——だが足りない。

一条、二条、三条、四条。次々と放たれる光線も俺を穿つことはない。穿つことなど有り得ない。

——だって足りなすぎる。

「何故、何故当たらないんですの!？」

彼女の驚きの声が聞こえる。

俺は見えるはずもないISの下で静かに唇を吊り上げた。

——足りなさすぎる。

「足りない! 足りないぞお！」

嗚呼、これだ。俺の求めたもの。俺が追い続けたもの。

だけど彼が見ていた景色はきつとこんなものじゃあない。俺自身さえまだ足りないと言うことだろう。

「セシリア・オルコットオ! 貴様に足りないもの! それは！」

吐き出す。万感の思いを込めて。世界に俺を刻むように。

「情熱思想頭脳思考気品優雅さ勤勉さ！そして何よりィー！」

——速さが足りない！！

1. プロローグ（後書き）

楽しんで頂けましたでしょうか？

プロローグというかダイジェスト版みたいな感じですね。

次からは時系列に沿って此所で出た話を順に一話一話書いていきます。

どうぞよろしく。

2. 『最強とは何だろうか?』 (前書き)

次話

2. 『最強とは何だろうか?』

賢明なる諸兄諸姉に一つ、俺は質問がある。

最強、とはなんだろうか? 強さとはなんだろうか?

——武力?

成る程、一つの答えに違いない。

今の時代、武力と言えば勿論最初に上げられるのは銃という存在だろう。

指一本の力で容易く人を死に至らしめるそれは確かに、強いと言えるだろう。

もっと単純に武術家なんてのも良い。

己が身体一つで、骨を砕き肉を裂く彼らは強さの代名詞と言ってもいいだろう。

——だが俺の答えは違う。

——ならば頭脳？

うん。それも答えだ。

古来から神と言われた人間さえ、天才と謳われる戦略家の手によって踊らされ、戦場に散っていた例は枚挙に暇がない。

効率的に敵を撃滅する策を次々と提示していく彼らは、確かに最強と言えるのかも知れない。

戦場というものの全てを見渡し、所詮個である武人を屠る彼らは身体的強度さえ無いものが多いながら、それでいて強敵だ。

——しかしこれも俺の答えとはほど遠い。

――それならば数？

成る程、成る程。

確かに戦略家も武術家も、その策を、その武を、その全てを押しつぶす圧倒的質量には敵わない。

一個の強者に千の常人をぶつけたのなら、この無情な現実世界では明らかに勝つのは千の常人だろう。

人海戦術、飽和攻撃。数というのはそれだけで確かな強みだ。

多数は少数を駆逐する。それは確かに世界の真理といっても良い。

所詮、個人というものは軍団には敵わないと言うことだろう。

——だが、それを俺は否定する。

さて、此所までの三つを頭に浮かべた諸君はまず大前提を忘れてい
ると言わせて貰おうか。
いや、聡明なる貴方は最早俺の言いたいことなどには気付いてい
るだろうが、まあ此所は語らせてくれないか。

俺もあの男に似て、割と喋るのは好きなんだ。

銃弾が人を貫くのは何故だろうか。

車に跳ねられて人が死ぬのは何故だろうか。

火薬の力？ 車の重さ？ おおっと、そんな間抜けな答えを出した奴はいないだろうな。

時速一？で迫る弾丸が人を貫き得るのか？

たかが十？程度で走る車に人が轢き殺せるのか？

——答えは否だ。

そして頭脳。

此所に俺の出した答えは無関係だと思われがちだが、そうでもない。それなりに売れる商品を一年に一回考え出す常人。

馬鹿売れするがそんな商品を考えつくまで二十年かかる天才。

どっちが有益かなんて分かりきったことだ。

いくら天才だとは言え、そんな人間が組織に重宝されるだろうか？

——答えは否だ。

数。

これもさっきと同じだな。

ちんたらすつとろく歩いて攻撃を仕掛ける軍隊は恐ろしいだろうか？
空からゆっくりと羽が落ちるような速度で振ってくる大量のミサイルは？

打ち落とせばそれで終わり。その場所に被害が出る前にぶっ壊しちゃえ
まえばどちらも終わりだ。

だって相手はナメクジなんかみたくすつとろいんだから。

そんな奴らが大量に迫ってきたところで脅威になり得るだろうか？

——答えは否だ。

そう、つまり俺が言いたいことってのは強さ、最強に上げられるもの
にはそもそも前提としてある要素が附随しているってことだ。
それこそが俺の掲げる『最強』。

——それが速度だ。速さだ。スピードだ。

亜音速で人にぶつかるからこそ、銃弾は人の体軀を穿つ。

その重い質量を保ちながら人に高速でぶつかるからこそ、車というのは凶器になる。

頭を高速で回転させ、素早く答えを出せるからこそ軍師は軍師たり得る。

敵に休む暇を与えていたんじゃない、人海戦術に意味はない。

逃げる時間を残しているならば、飽和攻撃は意味を成さない。

ランディ・ジョンソンの前に何故、平和の象徴は命を散らしたのか。

——速いからだ。

スター・プラチナは何故、最強のスタンドたり得たのか。

——パワー、そして何よりスピードがA（超スゴイ）だからだ。

何故、今俺たち人類がこの星の頂点に立っているか。

それは人間という種が最速で進化を続けてきたからだ。

ローマの道なんて目じゃないくらいに、速さというものは全てに通じる。

遅いことで良い事なんて一つとして有り得ない。

——だからこそ、俺は思うのだ。そして実感する。

俺の憧れたあの人がどうしようもなく正しいと言うことを。

つまり——。

——速さこそが最強

とまあ、これが俺の示す最適解。そして信条だ。

穴だらけかも知れないが、そこは高校生一步手前の若造の戯言だと聞き流してくれても、俺は全く構わない。

例え否定されたところで——。

——俺は信じた道を最速で突っ走るだけだから。

視線。

視線、視線。

視線、視線、視線視線視線視線。

——ハハッ、一体全体何の冗談だ。何故俺は此所にいて、何故こんな集中砲火を受けなきゃいけないんだ？

そんな思いを込めながら、俺は少しばかり離れた席で身を縮める元凶／馬鹿に視線を向けてやった。

世界のどこを探せば、入試の試験会場が分からずに迷い続け、挙げ句他の学校の入試を受けるなんて間抜けな事を出来る人間がいるのか。

何よりも笑えるのが、この俺を道連れにしたと言うことだ。

まあ、情けない話。俺も目の前に現れた存在に思考を停滞させてしまったわけだが。

——ん、停滞？

——ああ！ なんとということだ！ 最速を信条とし続けてきたこの俺が停滞！？

おいおいおいおい、今更になって考えればこの俺が思考を止めるなんて在ってはならないことをしちまってんじゃねえか！

——俺はこう思っている！ 思考というものは最速で回転させ続け

るものだ。思考を止めると言うことは次の行動が遅れるという事だ。どんな鍛え抜かれた人間であろうとも思考を止めれば、次に襲い来る自体に反応することは出来ない。それには死という可能性がつきまとう。だからこそ思考は常に速くしているべきだ、速さとは最高の危機回避能力なのだ。即時即考即解即答即行動！ 危険に遭遇した瞬間に考え、避ける為の答えを出し、すぐに行動に移す。時にはそれで逃げ切れないかも知れない。しかし少なくとも再び考える時間は与えられるのだから――

おっと、熱くなり過ぎちゃった。そう思って思考を止める。悪い癖だ。あの男に懂れすぎて何時しか思考まであの男よりになっ
てしまったきらいがある。

速く走るものには空冷機関が必要だ。情熱と冷静そのどちらをも持たなければ彼のようになれるはずもない。

炎のように熱く、氷のように冷静クールに、そして出来れば茶目チャームつ気もあればなおグッドだ。

しかし冷えた頭も少しばかりは苛つきを残している。俺に停滞なんてあの頃からしてこなかったはずの経験させたあの親友に、だ。思い起こせば小学校。そんな小さい自分からの長い付き合いではあるがこればかりは許せる気が微塵も湧いてきやしない。

いや、そりゃあ俺だって親友に迷惑をかけたことがないとは言えない。

盗――失敬。借りたバイクで走り出したこともあったし、盗ん――

おおっと。借り物の車でアイツを乗つけて走った記憶もある。
確かに警——パンダに追っかけ回された恐怖を味あわせたこと自体は悪いと思っちゃいるが、その時点でアイツは俺に対する理解が足りていない。

——真逆、あんなすつとろい奴らに俺が捕まるわけがない。

とまあ、こんな確信があって事に及んでいるわけだし、事実捕まったことは一度としてありやしない。つまり俺の方が速かったと言うことだろう。

……まあ、持ち主に無事返せなかったと言うことは多々あったが。それも些事——もんだ。

言い訳をさせてもらえんとするならば、俺は飢えていたのだ。

嗚呼、分かるだろうか。俺のこの心情が。

遙か昔、憧れたあの人に何時になったら追いつけるのか。何よりも追い求めたそれに至る為の方法に俺は飢え続けていた。

どこまで行っても背中すら見えない。——焦燥。

何時になろうと追いつける気がしない。——絶望。

何もかもが足りない。足りることなどあるのだろうか？ ——諦観。

ああ、あの頃の俺は確かに苛立っていた。
あの幼い誓いから、努力はした。勉強もした。鍛えもした。
御陰でこの辺では足で俺に勝てるヤツなんかいやしない。当たり前だ。追いつかれるわけにはいかないのだから。
最速を信条とし、あの男を目標とした以上、たかが人間程度に追いつかれるわけにはいかなかったのだから。

――で、苛立った結果がこれだ。

何の因果か、俺がいるこの場所はIS学園。男子禁制とは謳っちゃいないが限りなくそれに近い場所。
何でそんなところにいるかと言われれば――

――織斑^{バカ}一夏の所為だ。

どっかのバカが女性しか動かせないはずのISを動かしたから、さあ大変。
イエティでも捕獲するような勢いで関係者に詰め寄られ、捕獲。
世界を巡る大ニュースになってしまったという寸法だ。

――と。

此所まででは一夏が此所にいる説明にはなっている、俺が此所にいる説明にはなっちゃあいない。

まあ、答えは簡潔で明瞭で、最速の答えなわけではあるのだが。

——詰まったところ、俺も動かしてしまっただけだよISが。

いやあ、驚いたね。感動したね！

自分の理想に今のところ一番近いと理解しながら、それでも乗れるわけがないと思っていたものに乗れたんだから。

……結局、その感動も乗って数分後には無くなってしまったわけだが。

勿論、速いのは速かった。今まで乗ってきたどんな乗り物よりも速いことに違いはない。

しかし、心の何処かが訴えていた。

——お前の求めた速さはこんなものか？

——お前が夢見た男はこの程度か？

——お前が憧れた景色はこれなのか？

その通りだ。俺は自分の心の声にそう返した。
足りない、足りない、まだ足りない。

こんな速さでハイスピード・バトルなんてものを語ろうなんてお笑いぐさだ。

滑稽すぎて声も出やしない。

最期の希望が絶望に変わった瞬間だった。

こんな気分を味わうくらいなら、知らずに普通の高校に通っていた方がマシだった。

——と言うわけで俺は暗澹とした気分で此所に座っているわけなのだ。

そこに向けられる視線視線、視線のフルオート射撃。

俺を見て何が楽しいのかは知らないが、最早その視線は暴力的圧力を伴って俺と一夏を責め立てているわけだ。

機嫌も悪くなるってものだろ？

もう俺はいいから一夏でも眺めてろよ。あっちの方がいい感じにイケメンだろうに。俺はいいとこ文化的二枚目半と言ったところだろ。

「——い！　おい、久我！　聞いているのか！？」

「はあ？」

急に掛けられた声に俯き加減だった顔を上げた瞬間だった――。
目の前に迫る飛来物。白い円柱状のなにかだと言うことだけは辛うじて判断して――。

いやはや、さっき言ったばかりだ。いくら俺でも驚愕に身を凍らせるなんてそんな遅い事は、二の轍は踏まない。
首だけを仰け反らせて、それを躲す。

額を完璧に狙ったそれは、逆にそのコントロールが良すぎるのが災いして俺に当たることはなく――。

「――キャンッ?!」

――後ろの女生徒に当たった。つってもほぼ女生徒しかないわけなのだが。

「避けるな！」

「……あつぶねえなあ。ハッハッハッ、千冬さん。俺じゃなきゃ当たってましたよ?」

「当てる為に投げたんだ。それと織斑先生と呼べ」

投擲姿勢で、その凛々しい美貌を厄介なものでも見るように歪ませた既知の女性を俺は薄く笑みを湛えながら見返した。

……っか先生やってたのかこの人。一夏からは職業不明と聞いていたけど。

織斑千冬。まあ、名は体を表すとはよく言ったものでその表現がこの兄弟程良く現れている人間を俺は知らない。

弟の一夏は、本当にその名のような熱さを内に秘め、その姉は冬のように厳しく、そしてクールだ。

共通事項として、弟はシスコン。姉はブラコン――

「……なんで投げたんですか？」

「何か私の気に入らないようなことを考えただろう、貴様」

「む、無常矜持！」

「誰が蛇野郎だ！」

三度投擲されるチョーク。まあ、当たってやる義理もないので二本目と同じく手で受け止める。避けると後ろの女の子に当たっちゃうからな。

と言うかこの人、一夏に貸してたDVD見てたのか？　あまりアニメを見るようなイメージはないのだが……。

それにしても憎々しげに俺のことを睨み付ける人だ。

まあ、この人が俺を好いていないのは知っている。

彼女の場合、俺を一夏を悪の道へと巻き込む厄介な悪い虫か何かだと思っっている節があるからな。
あながち間違ってもいないが。

「ふん。貴様の自己紹介の番だ。さっさとやれ」

そんなことを考えていると、彼女からやっとな要件が吐き出された。

ああ、そう言う事なのか、と納得。

よくよく見れば、彼女の隣に眼鏡をかけた小柄な女性が見える。自己紹介は何とはなしに聞いていたが、確か山田とか言っただろうか？
他に目立つものと言え、頭を押さえて悶絶する一夏くらいだ。割と見慣れてはいるが。

しかしこの織斑姉。俺に速くしろと言ったのか？

成る程。そう言う事ならやってやろう。

ISなんてものには大した興味も湧かなくなったが、此所で三年過ぎすことはもう決定事項だ。

最速で逃げてもいいが、せめて高校ぐらいは出ておきたいし。

視線が集まる。

まあ、何を期待しているんだか、眼をキラキラ光らせやがって。

――それでは魅せてやろう。完璧な自己紹介というものを。

俺は静まりかえった教室の中、この場の全ての人間に俺という存在を刻む為に、声を上げた。

「――久我直道。最速を目指す男だ」

2. 『最強とは何だろうか?』 (後書き)

次話投稿。それだけ。

3, 『幼馴染み』(前書き)

三話。感想くれた方有難う。

3, 『幼馴染み』

休み時間。

俺の自己紹介の後、クラス全員がポカンした表情を浮かべ、「貴様は碌に自己紹介も出来ないのか!」と織斑姉にチョークを投げられた。

……ふう、時に速さとは虚しいものだ。あまりの速さに誰も着いてくることが出来なかったと見える。

どうやら俺には時代さえ未だ追いついていないようだ。仕方がない。最先端に行くものはどんな時代も中々人には理解されないモノだし。

——とまあ、戯言はさておき。

「よう、元気だったか、箒ちゃん? 六年振りだな」

「……箒ちゃんは止めろ」

ぎろり、と。

刺すような鋭い目で俺を睨み付けるのは、六年前に俺と一夏の前から去っていった幼馴染み。

その視線に肩を竦めてみれば、更に視線の圧力は増してしまった。俺を刺し殺す気か。全く恐い恐い。

いやあ、それにしても変わっちゃいねえ。
一目見れば、すぐに分かるぐらいの変化のなさ。

いや、そりゃあ多少伸びて膨らんじゃあいるが、その雰囲気も佇まいも随分昔に見たそのままだと、俺はそう感じた。

しかしまあ、あのキング・オブ・鈍感の称号を持つ俺の親友。一夏くんが気付いているかどうかは俺を持ってして定かじゃあない。

俺命名、『現在まで生き残った恐竜』だ。

どうしてあそこまでニブチンに育ってしまったのか、育て方を間違えたか？

ま、アイツは俺に育てられた憶えはねえだろう。育てた憶えもないし。

それならあれだ。洗脳教育だ。きっとあの織斑姉が大事なだくいじな弟に悪い虫が寄ってこねえように洗脳したに違いねえ。

——ビババババツ！ てか？

今の俺が育てたのならあんな鈍いやツにはさせやしない。

五反田妹を見てみる。報われない恋に生きる乙女程、美しくも哀れな生き物もないだろう？

しかし、あの男の言葉を借りるならこれもまた文化だ。しょうがな

い。

だが付き合いとしてこの箒を最初に見ている以上、コイツに塩の一つや二つや三つに四つくらい送ってやるのが俺の役目と言うものだろう。

箒よりも遅く俺と出会ってしまった不運を嘆け、五反田蘭。速さとはこんなところでもアドバンテージになり得るのだ。

「鈍さとは罪だと、そうは思わないか？ 箒」

「は？ 直道お前いきなり何を――？」

「そう！ 鈍さとは罪だ！ 鈍いって事はつまり遅いって事だ。コイツは戴けない！」

「だ、だからお前何を――？」

「痛みに鈍い、これがいいことだとお前は思うか、箒？ いや、そう思っても無理はない。痛いって事は嫌なことだからな、嫌なことは誰だって後回しにしたいに決まっている。しかし痛みというのは生命の危険信号だ。それが遅れてやってくるなんてそんな事になっちまった日には目も当てられない！ いつの間にか手遅れになっちまってたなんて事も有り得るからな。精神的な鈍さ、コイツも駄目だ。人からの好意に鈍いなんて全くダメダメだとは思わないか？」

つまりそれは一つの愛を見逃しちまってることに他ならない！ 人生に何度出会いがある？ 自分の好みのタイプの人間に会えるのはその更に少ない回数だ。つまり痛みも人の好意も最速で気付くことが最善に他ならない！ 痛みという危険信号に速く気付くことが出来ればすぐにそれを治療することが出来る。自分への好意を最速で捉えれば人生はバラ色だ！ つまり速さこそ一番人間に必要なものなんだ！」

「——っ!？」

「そうは思わないか、箒？」

「そ——」

「そ?」

「その通りだっ！」

——ああー、まあアレだ。煽っというのもなんだが……。食い付きが良すぎんぜ、箒ちゃん。

随分と溜まってたんだなあ。哀れだなあ。

そんな俺の生暖かい視線もなんのその、気付くことなく彼女はたま

りに溜まったその鬱憤を吐露し始める。

「そうだ！ 一夏が鈍いのがいけないんだ！ 全く私がいつもいつもいつもどんな気持ちで隣に立っていたとアイツは思っているのだ！」

「お、おおう……」

「鈍すぎるのだ、一夏は！ 人の気持ちに微塵も気付く気配を見せないとはどういうことだ！」

瞳を吊り上げて怒るのは結構だが、声が大きい。

まだ教室内に一夏くんがいますよー？

で、ちらりとそちらに目を向けてみれば、項垂れ居心地が悪そうに身を振らせる少年一人。ああ、そうか。お前も余裕がないのか。

どうやら未だ向けられる女子の熱視線に精神的に参っているらしい。周りの音などを聞く余裕は無さそうだ。

俺はと言うと、箒の奇行により全員がこっちから目を逸らしている状態。楽だ。

ようやくスッキリしたのか、ゼーハーゼーハー息を荒げながら肩を上下させる幼馴染み1。――さてそろそろか？

「スッキリしたか、箒さんよ？」

「う、うむ」

「さ、それじゃあ六年振りの幼馴染みに挨拶して来いよ」

「んなあ——！？」

「ん？ どうした？」

「な、なぜ私から話しかけなければいけないのだ！ あっちから話しかけてくるべきだろう！？」

ふうん？ 声を荒げ、顔を真っ赤にして心拍数上昇。つまり恥ずかしいのか。

——しかしそれは容認できない。

待つなんてそんな消極的で速さに欠ける行為をこの俺が許すとも思っているのか！？

「なあ、箒。俺はこうも思っているんだ。人々の出会いは先手必勝だ。どんな魅力的な相手でも、出会いが遅ければ他の相手と仲良くなっている可能性もある。なら出会った瞬間に自分が相手に興味があることを即座に伝えた方がいい、速さは力だ。興味を持った相手には近づく、好きな相手には好きという、相手に自分を知って貰

うことから人間関係は成立するんだから。時にそれが寂しい結果を招くこともあるだろう、しかし次の出会いが何時また来るかもしれない。ま、これはある男からの完璧な受け売りだがな。しかしそうは思わないか？」

「うう……」

おお、迷ってる迷ってる。

その時点ですでに速さは足りていないが、まあ流石に俺以外に最速を求めても仕方がない。

まあ、なんにしたって後一押しか。

「……大体にして、お前そんなのんびりしてていいのか？」

「ど、どういう意味だ？」

「おいおいおいおい、お前まで一夏の鈍さが伝染っちゃったのか？ 周りを見るんだ、箒。何が見える？ 女の子が見えんだろう？ 男はいないだろう？」

「う、うむ……？」

「はあ、勘弁してくれよ。マジで最近鈍感さも伝染すんのか？」

絶対俺に伝染すなよ？ 遅くなるなんてのは御免だ」

「だから結局直道は何を言いたいんだ!？」

「いいか？ 一夏もあんな馬鹿なヤツではあるが思春期だ。女の子には興味津々なんだよ。それをお前二の足なんか踏んでこのまま見てみる。こんな女だらけの学院、ぽっと出の女に持ってかれちゃうぞ？ いいのか？」

「——ッ!？ ちょ、ちよつと行ってくる！」

慌てた様子で幼馴染みの元に早足で歩いて行くこれまた幼馴染みを見送りながら、俺は静かに肩を竦めた。

——全く、どいつもこいつも遅すぎて困っちゃう。

——しかし遅いヤツを引っ張ってやるのもまた最速の俺の役割に違いない。

——それが友なら尚のこと、だ。

一夏の方を見やれば、箒に話しかけられ驚いたような表情を浮かべ

ている。

そのまま二人は二言三言交わすと連れだって教室を出て行った。

……しかし夫婦を復縁させるのも楽じゃあないな。ちょっと疲れた。嗚呼、しかし出て行く時にちらりと見えた嬉しそうな箒の横顔。疲れた甲斐もあるというものだ。

「……青春。ああ、これも一つの文化か」

なんて呟いてみたのはいいものの、事態は割と切迫している。

防波堤、別名一夏が居なくなった事で、クラス中の視線は俺のもの！ヤバイ、何がヤバイって面倒だろう？ 質問攻めが目に見えた以上、俺が取るべき行動はただ一つ！

態々言う必要も感じないが、あ・え・て言わせて貰おうか！

「俺は——逃げ足も最速だ！！」

脱兎！

――で、二時間目。授業中である。

え？ 教室から逃げ出していつて遅刻しなかったのか、だと？
真逆、俺が遅刻なんてそんなモノするわけがない。

目の前では、……えっと。ん？ や、やま？

まあ、眼鏡を掛けたちっこい先生が授業を繰り広げている。

うん。自己紹介を碌に聞いていなかった所為で名前がうる覚えだ。

俺があの男を目指すに当たって唯一、真似をしないように気をつけてきた悪癖がある。

それはわざと名前を間違ふことだ。こればかりは真似すると人間関係に支障が出る。

まあ、あの男にしてみれば親愛の証なのだろうがこればかりは、……なあ？

しっかしなんだ。さっきから俺の親友が嫌に挙動不審だ。

なんだどうしたトイレか？ 休み時間中に済ませてこいと言っただろうが！

「はい。皆さん、此所までで分からないところがありますか？」

一夏の動揺が更に増した。

辺りをキョロキョロ。まるで友達でも探しているような仕草だ。ん、なんだ。こっち見んな。

どうして俺を見て驚愕の表情を浮かべる？ 当てが外れたとでも言

いたげだな、オイ。

すると、一夏はいきなり男らしい、決意を固めたような表情を浮かべた。

一体何なんだ、とそう思った瞬間。

「はいっ！」

「はい、織斑くん。どこが分かりませんでしたか？」

「一切全くこれっぽちも分かりません！」

「——えッ？　ぜ、全部ですか？　えっと今の段階で分からないと言う人は他にいますか？」

凍るように静まりかえる教室。
爆笑する俺。

飛んでくる——出席簿！？

いや、掴むけど。流石に銃弾未満のスピードじゃ当たってやる気も起きやしねえ。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

一夏が答えた瞬間、教室に轟く快音。

黒い、出席簿という名の凶器が一夏の頭を完璧に捉えていた。

——ん？　あれ？　俺が持ってるこれは何だよ？

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。再発行してやるから一週間

で憶えろ」

「さ、流石に一週間は……」

「私は、いいか？ 私はやれと言っている」

「りよ、了解です」

ふむ。相も変わらず織斑家のヒエラルキーは変わっていないらしい。一夏はきつとあの姉に一生頭が上がらないのだろう。

「久我くんは大丈夫ですか？」

心配したような声が俺にもかかる。

しかし、無用だと言っておこう。

ISなら前は興味があったから色々調べたし、それなりの知識がある。

特に今のところついて行けないような自体にはなっていない。

まあ、心配してくれたこと自体には礼を言うべきだろう。

……ええーと、や、やま、やまやまやま？

——ああ！

「大丈夫です。態々心配して頂いてすいません、山谷先生」

「それならよかったで——……す？」

なんで疑問型？

「あ、あのあの久我くん？」

「はあ」

「わ、私の名前言ってみてくれませんか？」

おかしな事を聞く人だ。今言っただろうに。

「山谷真耶（やまやまや）先生ですよね？」

「山田です！」

「ああ、コイツは失敬」

「やまやまやだとなんかすつごく間が抜けた感じがします！ 先生の名前はちゃんと覚えてください！」

「すいませうん。いや、申し訳ない」

「副担任の名前ぐらいちゃんと憶えろ馬鹿者！」

今回の千冬さんの攻撃は甘んじて受けることにした。

いや、仕方がない。人の名前を間違えるのは失礼なことだからな。こんな要らないところまで似るとは、流石最速。精神汚染速度も他の追隨を許さないな。

――で授業も終了。

俺は机に突っ伏して溜息を吐く親友の元へと向かった。

「おい。大丈夫か、一夏」

「大丈夫じゃない……。一週間でこんなの憶えきらないだろ普通」

「そりゃあお前、最速でゴミ箱に参考書を捨てたヤツが悪いだろ。
ん？ 最速？ ……嫉ましいな」

「直道はあい変わらずに速度主義者だな。……っというか朝から気
になってたんだけどさ」

「? なんだ?」

気になるところ、と言われても心当たりがない。

顔——変わるわけがない

体調——本日も良好。今すぐ最高速度を出せるコンディション。

身長——縮むはずも無し。

制服——うん。最高にイカしてる。

「なんでそんな制服の裾長いんだよ?」

「? 格好いいだろ。此所制服の改造は割と許されてるらしいしな。
つーか一夏、お前これだけ俺と付き合ってた知らないのか」

「何を?」

「——俺は形から入るタイプなんだ」

「……それは知ってる」

後は格好いいサングラスさえあれば完璧なのだが、未だに俺のお眼鏡に叶うサングラスには出会ったことがない。

俺の答えを聞いて、疲れたように「このクーガー教信者め……」などと洩らす一夏に俺は苦笑を零した。

「まあ、そんな気を落とすなよ一夏。わかんねえところは俺が教えてやるからさ」

「マジか!？ やっぱり持つべきものは友達だな、直道!」

現金なヤツだ。まあ、裏表のないヤツというのは好ましくもあるが。

——そんな時だった。

嗚呼、俺はすっかり忘れていたのだ。

——何時だってイベントは唐突に。

——何時だって厄介事は最速で。

——何時だって騒乱というものは急速に迫りくると言うことを。

「——ちょっと宜しくて?」

嗚呼、こうして厄介事は俺たちの前に舞い降りた。
鮮やかな金糸と、空を映すような青い雫を伴って。

3, 『幼馴染み』(後書き)

三話。お気に入り登録が増えててびびった。

4. 『金のドリル』（前書き）

四話。こっちはアルカディアのストック分を気が向いたら上げる感じになっているので更新は気が向いた時です。

4. 『金のドリル』

「——ちよつと宜しくて？」

そう声を掛けられて、俺と一夏はその発生源へと目を向けた。
そこに居たのは一人の少女だった。

……とは表現してみたものの、この学園で少女じゃないのは教師と俺たち二人ぐらいだから当たり前と言えど当たり前だ。

……んー？ 誰だ、この金髪縦ロール（ミニ）は。

随分と偉そうな佇まいは、どこか気品があり見るからにどこぞのお嬢様だ。

腕を組みながら人を見下す様が嫌に板についてやがる。

「訊いてます？ お返事は？」

「——ああん？」

「ああ！ 訊いてる！ 訊いてるけど何か用か？」

随分と嘗めた口を偉そうに囁らせる金髪に、何か言い返そうとしたところ何故か一夏が慌てて飛び出してくる。

別に初対面の女性を殴り飛ばすという性癖は持っていないのだが、俺の声に何か不穏当なものでも感じたのか？

おいおいおいおい、いくら何でも古くからの馴染みをそんなに信用してねえってのはどういうことだ？

全く、いくら俺が最速とは言え流石にこれくらいじゃあ――。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「――退け、一夏」

「待て待て待て待て！ 落ち着け、落ち着くんだ直道！」

――待て？

――待てだと？

――この俺に待てと言ったのか？

「おいおい、一夏あ。お前は待つという行為がいまいちどういうことなのか分かっていないらしいな。待つ、それは一見素晴らしい行為だ。恋人を待つ時間、好きな食べ物が出てくるのを待つ時間、好きな番組が始まるのを待つ時間。成る程、それは素晴らしい物だろう。だがしかし本当にそれは幸せなことなのか？ 誰でも、そこそがきでも知ってることだが時間ってのは有限だ。俺たちは日々時間という名の上った先から一段前が崩れるような階段を上り続けていると言ってもいい。待つと言う行為はそもそもその時間というものを無駄にしていると思わないのか？ 恋人を最速で迎えに行けばその分彼女との甘い時間が増える、飯を待つこと無く自分で作れば何時だって満足だ、待つと言うその事象にはそもそも速さが足りていない！ 何事も速く行動に移すことこそ有限な時間をお駄に使わない最高の答えなんだ！」

「だあー！ だから落ち着けての！」

「ちょっと！ 貴方たち、わたくしが話をしてあげようというのになんですのその態度は！？」

「ああー？ だから誰だよ、テメエ」

「――て、テメツ！？ ま、まさかわたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「ちゃっかり自慢話してんじゃねえよ、糞ロール」

「くっ——!?」

「はいはいはい！ 質問質問！」

怒りに顔を真っ赤に染める金髪を見かねたのか、一夏がいきなり睨み合いをし始める俺たちの前に割ってはいる。
一夏の必死な様子を見て少しは溜飲が下がったのか、金髪はキツと俺を一度睨み付けると一夏の方に顔を向けた。

「ふ、フン。下々の者の要求に応えるのが貴族の務め、宜しくてよ」

「代表候補生ってなに？」

出てきた問いは予想を斜めに上回り、大気圏を突破して何処かへと消えた。

……コイツ、マジで言ってるだろうか。いくらISに関わることが少ないとはいえ、耳にしたことくらいあるはずなんだが。

案の定、そんな問いを予想すらしていなかった金髪糞ロール——失敬。
金髪は口を間抜けに開け、ぱくぱくと開閉を繰り返している。

金魚か何かか。金繋がりなのか。

「あ、あ、あ……」

「あ？」

「貴方、本気で言ってますの!？」

すごい剣幕で一夏に迫る金髪。仰け反る一夏。

大分腹に据えかねたらしい。その髪のだリルが怒りを表すようにグルグルと……、回れば少しは面白いんだがなあ。

「で、なんなんだ？ 代表候補生って」

「んー？ つまりエリートだよ、エ・リ・ー・ト。将来国の代表になるかも知れない奴らのことだ」

「そう！ 本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇蹟……幸運なのよ。その現実をもう少し理解して頂けるかしら？」

「そうか、それはラッキーだ」

「そうだな。すげえファッキンだ」

「馬鹿にしていますのっ!？」

馬鹿にしていけないように聞こえるのなら、その形のいいお耳を交換してくることをお勧めする。

……っか、そもそもだから何だって話だ。

国、なんて小さい器の頭になってなんの意味がある？

俺は世界を駆け抜ける男だぜ？ たかが国なんざ小さい小さい、小さすぎる。

そんな小さな目標に一体何の意味があるのか。俺には微塵も価値が感じられねえ。

「……全く、男でISを操縦できると聞いたから少しは期待してみれば、とんだ期待外れですわ。一人はISに関して何も知らないし、もう一人は知性の欠片も感じられない不良もどき。ガッカリですわ」

「俺に何か期待されても困るんだが」

一夏の言うとおりだ。勝手に期待して、勝手に失望した挙げ句俺らに絡んでガッカリですわ、とはとんだお嬢さんもいたもんだ。

「ふん。まあ、わたくしは優秀ですから？ 貴方たちのような人間にも優しくしてあげますわよ？ 泣いて頼めばISについて優しく教えてあげてもよろしくってよ。何せわたくし、入試の実技試験で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

……ああ、もう面倒臭い。

「一夏あ、後任せたわ。ちゃんと話聞いてやるんだぞ」

「お、おまつ！？ 俺を見捨てる気か！？」

ギャーギャー騒ぐ一夏と金髪に背を向けて、俺は自分の席へと戻る。あの金髪の無駄な話を無駄に聞いている暇はない。時間の無駄だ。時間というものは有意義に使わなきゃいけない。

あんなアホみたいな話をしてくるくらいなら、まだ本を読んでいる方が何億倍も有意義だ。

そうだ、俺はあの男を目指す以上最高の文化人になるという業も同時に背負っているのだー。

ちなみに愛読書は『兎と亀』な。

ん？ 子供か、お前は……って。おいおいおい、一体何を言っている。

あれほど俺が必要とする本はないだろう？

速さと遅さ。その関係をあれほど端的に著した本は他にない。

そして同時に、アレは速さを持つ者への戒めも同時に含んでいるんだぞ？

何故、兎は負けたのか。そりやもう簡単だ。寝てたからだ。

何故、アイツはそんな間抜けなことをしたのか。それは亀が遅いからだ。

速さ故の傲慢さ、それが兎ちゃんの敗因ってわけだ。

つまり歩みを止めた最速は、すでに最速ではなく遅さの代名詞とさえ言える亀にさえ負ける最遅の存在に成り下がる。

最速が最速である所以は、常に最速であること一つのことだ。

歩みを止めず、常に道の先を走り続けなければ最速は名乗れない。

その事をこの本はそれこそガキにでも分かるように、優しく教えてくれる、と言うわけだ。

「……お前は昔からその本が好きだな、直道」

「ん？ なんだよ、お前にも無関係ってわけじゃないんだぜ／＼兎ちゃん。お前も出会いの速さを理由にタラタラしてみろ。今に後ろから追いついてきたヤツにゴールを奪われるぞ？」

「おい、その本を破らせろ直道。表紙の黒い兎が嫌に気に障る」

「知るか、止めろ！」

いきなり切れやがった。一体どうしたんだ、コイツは。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と言うことで三時限目。

教壇に佇むは、世界最初にISに乗り込んだ世界最強の女。我らが織斑千冬さんだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、織斑姉がそんな話を始める。

まあ、話を聞いているところ詰まった話クラスの委員長を決めるって話らしい。

全く、そんな簡単な話をそんなにとろとろと語るとは、あの織斑千冬も堕ちたものだ。

これだから老いというのは恐ろし――。

「――キャン!？」

「はっはっはっは、危ないじゃないですか、千冬さくん。女の子にそんな物投げちゃ不味いですよー?」

「お前が避けなければいい話だろう。それと織斑先生と呼べ!」

「――あうっ!？ はあはあはあ……」

もう一発飛んできたが勿論避ける。

ちなみにアレだ、前回と違って受け止めないのは後ろの子に私を氣遣う必要はない、と妙に男らしい台詞を休み時間中に言われたからだ。

しっかし後ろから聞こえてくる声が妙に荒い。逃げ出したい。

それにしても、うん。クラス代表とはなんか面倒そうだな。大してISに興味が湧かなくなっちゃった俺にはデメリットしか無さそうな話だ。

ふむ……。そんな面倒な状況から最速で逃げるには――。

「千冬さん。――おっと」

「いたあ!？」

「何だ？ 発言を許可しよう」

「そのクラス代表なんですがー、織斑くんがいいんじゃないでしょうかー」

「ふむ……」

考え込むように顎に手を当てる織斑姉。

一夏に目をやれば、なんか他にも織斑がいるのかってそんな顔をしていたやがる。

……やっぱり、鈍いな。此所は一つ俺が鍛え直すべきだろうか？

「まあ、いいか。織斑……つと、他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「え、俺？」

やーつと現実に戻ってきやがった。此所まで遅いと救いようがない気すらしてくる。

つか、名前が拳がった時点で気づけよ。織斑なんて妙な名字自分以外に見たことあるのか、お前は。

「直道！ お前、一度ならず二度までも……！」

「おいおいおいおい、いちやもんつけるんじゃないよ、一夏あ。最速で策を立てて何が悪い？ 結局お前が遅かったのが行けないんだろうが。恨むなら自分の鈍さを恨みな」

「お前がその気ならこっちにも考えがあるぞ！ せんせーいってえ！？」

「とりあえず席に着け、邪魔だ。で、なんだ？ 言ってみろ」

ふう。全く家の子の脳味噌の回転は本当に悪いらしい。

目の前に最恐の姉がいるってのにその前で態々叫びやがるとは、そんなバカは出席簿で叩かれるのが相応しい。

暫く頭を押さえていたが、そこはもう馴れているヤツだ。すぐに気を取り直したのかさっきの台詞の続きを言い始めた。

「先生！ 俺は直道のヤツがやるのがいいと思います！」

「……ダチを売るとは見下げ果てた野郎だな、一夏」

「誰が先にやったんだ、誰が！？」

「そりゃあお前、俺だろ。誰よりも速く言わなきゃ俺じゃあねえ」

「つまりお前が悪いんだろうが！」

「いや、悪いのは遅かったお前だろ？」

「会話が成立してねー！」

なんだそんな急にテンション上げて。嬉しかったのか？

まあ、最速の俺にこういうのは向いていない。俺にできるのは精々無理矢理押すか引っ張るかだからな。

これも速すぎるが故の弊害だ。俺がクラスの代表になんかなった日じゃあ、クラスのヤツがついてこないと言うより、ついてこないからな。

「納得いきませんわ!!」

いきなり後ろから声がした。

振り向いてみれば、そこで騒いでいたのはさっきの金髪だ。

その端正と言ってもいい顔は、無然とした表情に彩られている。

「そのような選出認められません！ 大体実力から行けばこのわたくしが代表に選ばれるのが必然ですが――」

流れるように口上が続いていく。

そこまでの長台詞を噛まない辺り、割と素直にスゴイと思うがそれと今俺の感じる苛立ちは別の物だ。

――ああ。

——ああ。

——ああ。

この女、セシリアとか言ったか？

成る程、そのお前の言い分は正しいし間違っただけを肯定してやろう。

しかし——気に入らない。

何が気に入らないって？ 今更俺にそんなことを言わせるのか？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——！」

「あゝ、やだやだ。文化を知らないヤツは。……そろそろ黙れよ、コロネ頭」

「な、何ですって！？ わたくしのことをおっしゃってますの！？」

「ああ？ テメエ以外に誰がいるツツーんだよ？ さっきから聞いてりゃ、グダグダグダグダ回りくどいこと喋りやがって。さっさと本音を言えよ。俺たちが気にいらねえんだろ？ 目障りなんだろ？ ぶっ潰してえんだろ？ 逆らう気も起きない程、完膚無きまでに叩き潰したいんだろ？ 俺たち人間の残り時間なんてのはなあ、お前

のかつたるい口上を延々と聞いていられる程長くはねえんだよ！
さあ！ 言えよ、セシリア・オルコット！ 気にいらねえ奴が、目
障りな奴が、叩き潰したい奴がいるのなら！ お前は一体どうい
う行動を取る！」

「い、言うに事欠いて人の頭を菓子パン呼ばわりなんて、聞き捨て
なりませんわ！」

「だったら一生抱えてな」

「――ッ！ 決闘ですわ！」

――嗚呼、良い答えだ。セシリア・オルコット。話が速い。

――目の前に敵がいるのなら打ち倒すべきだ。

――目の前に気に入らない相手がいるのなら打ち砕くべきだ。

——目の前に壁が有るのなら撃ち貫くべきだ。

「——上等。ただし、俺の速さに腰抜かすんじゃないやねえぞ？」

——だったら俺はまず目の前に立つこの女を最速で貫いてやろう。

4. 『金のドリル』(後書き)

貫くって何それエロイ。
と思うのは俺だけでしょうか。

5. 『俺とコイツとあの人と』 (前書き)

5話目。

感想くれた人ありがとう。

主な原動力なので助かってます。

5. 『俺とコイツとあの人と』

あの決闘宣言から早一週間。

何故か、いつの間にか一夏も一緒に戦闘することになっていたのはどういうことなのか、未だに俺にも把握できていない。

この一週間、一夏は嫁（箒）といちゃいちゃと特訓していたらしいが、俺は特にそんなことはしていなかった。

ただいつものように走って、走って、走り続けた。

この学校の周りが中々良いコースになっていて、俺は日々世界を縮めることに躍起になっている。

後は、……そうだな。罪と罰を読破したり、零式を読んでみたり文化的な生活を送っていた。

ISは訓練機の予定も埋まっていたに乗れなかったようだし、そもそもあんな中途半端な物に乗るのは御免だ。

千冬さん曰く、「お前らには政府から専用機が送られる」との事だが……。

正直期待しちゃあいない。既存のISなんてのはそうそう変わるものじゃないだろう。

——で、決戦当日。只今第三アリーナAピット。

正直だるい。もう帰っても良いか？ 良いだろ？ 良いよなあ？

隣じゃあ一夏が箒と千冬さんに声をかけられている。

……なんだ、この格差は。あれか、キャラが濃すぎるのか。

「あっ！ 来ました！」

真耶ちゃん——こう呼ぶと怒ってるんだかよく分からない剣幕で注意されるが——が、声を上げる。

開く搬入口。見えたのは真白のIS。そして——。

「これが織斑君専用IS『白式』と、久我君専用IS『R・G・S
ラディカル・グッド・スピード
です！」

「ん？ どっかで見たことあるような……？」

「なんだ、一夏。新しく作られたISをお前が見たことあるわけないだろう」

「久我君のISは、全身装甲なんですね。今時珍しいですねー……？
久我君、どうしました？」

「何をそんなに呆けているんだ、お前は？」

申し訳ないが、横にいる一夏達の声などすでに俺には届いていなかった。

目の前に佇むISに、俺の心は完璧に奪われていた。

「……は、ハハハ。夢かよ、これ」

目の前に見える流線型のボディ。

白と赤紫を基調とした色調。丸みを帯びた手甲とブーツのような脚甲。

どこまでも無駄を省いたそれは美しささえ感じる。

そしてそれは何より、昔夢見た憧れ。

この瞬間、俺の中で此所までの疑問だった何故俺がISに乗れたのか、と言う疑問が一瞬にして瓦解した。

なんとまあ、ガキくさい理由もあった物だ。そう思う。

——要は自分の作った玩具を同好の士である俺に見せびらかしたかっただけだったのだ。彼女は。

こんな伊達と酔狂しか詰まっていないような機体をどこの企業が形にすると言うのか。

有り得ない。こんな事をするような人間を俺は一人しか知らない。

ピーキーで済めばまだマシだろう。俺が思っているとおりならこの機体はそんな軽い言葉じゃあ済ませられない。

ヤベエ、なんてイカれて、そしてイカした女なんだ。アンタは。

——惚れちまいそうだ。

「どうした。お前からだぞ、久我。速く装着しろ。時間がないから初期化と最適化は実戦で済ませろ、出来なければ負けだ。分かったな」

横の千冬さんはそんな事を言ってくれるが、俺に言わせれば何の冗談なのかという話だ。

俺がこれに乗って負ける？

そんなことはあの男に誓って許されないし、これを作ったあの人もそんなことでは顔向けできない。

手甲に腕を通し、ブーツを足に装着する。上からバイザーを被ったところで、俺の身体にフィットするようにタイツのような生地が俺の剥き出しの部分全てを覆う。

訓練機である打鉄なんかとは比べものにならない、感覚の鋭敏化。センサーの類も全てが全てあんな物より優れている。

——そして流れるBGM。

……おかしいだろ、いや、確かにテンションは上がるが。
懐かしのスクライドのオープニングテーマがISの中に響く。

「問題なく動いているようだな。久我、気分はどうだ？」

「だ、大丈夫です」

「？ お前らしくもないな、緊張しているのか」

「そ、そりゃそうですよ。いくら俺でも緊張しますって」

ちよつと話しかけないでくれ。テンパッてるんだから。

ちよ、いったん止まれよBGM。スイッチどこだ、スイッチ！

「……まあ、大丈夫だろう。行ってこい」

千冬さんに促されピットの外へと歩き出す。ちなみに今、二番。

ISのハイパーセンサーには、オルコットのIS、青い雫が感知さ
ブルータイアーズ
れているのだが……。

「集中できないんだけど、これ」

『はろ。みんなのアイドル東さんだよ』

「うおう!？」

BGMと一緒に聞こえてきた声に思わず声を上げる。

聞こえた声は、昔々に効いた声と変わりない。相変わらず元気そう
だ。

『君がこれを聞いていると言うことは無事に届いたみたいだね？
あ、ちなみにこれ機体説明の為にあらかじめ入れといた音声だか
ら、返事しても聞こえないよ！ 簡単な受け答えは出来るようにし
てあるけどね!』

「ほおー」

『一回目の戦闘が終わったら自動的に消去されるからね。寂しい？
寂しいでしょ、なおっち』

「しかしウザイな、地味に」

言いながら、つい笑みが浮かぶ。

……全く、変わらない人だ。

人を顧みない、ウルトラマイペース。彼女は自部を中心に世界が回
っていると思っている節がある。

まあ、事実世界は今、彼女の作品を中心に回っているから、あなが

ち間違いでもない。

『まあ、細かい装備は戦闘しながら確認するとして。外に出る前だったら左手を腰に当てて、右手を空に突き出してみてくれる?』

「? こんな事になんの意味が……」

言われたとおりに姿勢を取る。

途端に脳内に流れる外の三つの情報。風力・温度・湿度。
……な、何という無駄機能。

『どうどう? スゴイでしょ』

「別にすごくはねえんですけど」

——しかし、此所まで御膳立てされればやらねばなるまい!

「風力・温度・湿度、一気に確認!」

『ならばやってやりますかあ!』

「アンタ、これ本当に録音か？」

『ギクウ!』

自分で言うな、と。

感じる昂揚感に身を浸しながら、俺は最初の一步を思いっきり踏み出した。

——と。

目の前にいきなり迫る壁。

「おおおおお!?」

『ありゃ、ISってイメージが占める部分が多いんだから、その機体に馴れる前に思いっきりとかイメージすると危ないよ?』

「遅えよ!」

『私が遅い……! 私がスロウリィ!!』

「喧しいわ!」

「……なにをやっていますの？」

何とか足を前に出して、壁への衝突を防ぐ。

遅すぎる注意事項につっこんでいると、空から呆れたような声がかかった。

空を見上げれば、抜けるような青い空。

そしてそこに浮遊する、オルコットとそのパートナー、『ブルーテ
ィアーズ』。

腰に手を当て、いかにも偉そう。いちいち大仰な奴も居た者だ。

「まず、逃げずに来たことを褒めて差し上げますわ」

「デメエに褒められても嬉しくねえよ」

『そうだそうだー』

挑発を仕掛けてくるオルコットに小馬鹿にしたようにそう返す。
余裕たっぷりだった顔が引きつる。

あと、束さん。ちよつと黙ってて。

「最後のチャンスを上げようと思いましたが、止めにしますわ」

オルコットはそのとんでもなくでかいレーザーライフルのトリガーに指をかける。

ISの中に響く警告音。

やる気満々だなあ、おい。

『なおっち、なおっち。RPGのお約束に従わなくちゃ！ 戦闘に入る前に装備を確認して！』

「了解！」

『……まあ、何もないけどね』

「態々見させるんじゃないよ、このバカ！」

「——さあ、踊りなさい久我直道！ わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！！」
ワルツ

「あ？ 良いぜ、精々付き合ってやんよ。ただ、俺のダンスは——ちよつとばかり荒っぽいぜ？」

そして放たれる青い光条。

俺はそれを――。

――吹っ飛んで躲した。

一步踏み出したと思ったら、俺は再び逆側の壁にすっ飛んでいく。
しかし同じ失敗をしたんじゃあ芸がない。

手を思いっきり地面に突き立て、削りながら何とか止まる。

「束さん、すっげーピーキーだろこれ、どうなってんだよ？」

『あつたりまえ。』 現行のISでその子に勝る加速能力と機動力を
持つ機体なんて一台もないしね。まあ、ついでに言わせて貰うと』

「何ですか？」

『なおっちの操縦がド下手くそ』

「身も蓋もありやしねえ！」

『まあ、練習がてら逃げ回れば？ 頑張れ男の子』

「うおう!？」

いつの間にかブルーティアーズから射出されていたビット四つが、一斉にレーザーを吐き出す。

再び回避。またしてもその速度に振り回される。

しかし、次は足で地面に思い切りブレーキを掛ける。

挟れる地面。舞い散る土埃。

——少しずつ、イメージを修正していく。

コイツに振り回されているようじゃあ、いつまで経ってもあの男に追いつくことなど出来はしない！

「——ちょこまかと！」

「う、おお——！？」

『R・G・Sのコンセプトは、超超超高速近接特化なんだよ。正直、第一次形態移行しないことには特に何にも使えるのはないんだよね』

吐き出される光条がその量を増していく。

正にその青い雫の名前に恥じぬ、雨ティアーズのような苛烈な弾幕。

——避ける。

再び振り回される、がさつきよりも土を抉らず、どうにか止まる。

――避ける。

たたらを踏んで、少し体勢を崩す。もう土埃は上がらない。

――避ける避ける避ける。

少しずつ、R・G・Sの事を理解していく。もう無様な体勢は晒さない。

『答えは分かかってて敢えて聞くけど――武装入れという欲しかった？』

――分かってるんだったら聞くんじゃねえ。

この機体に武装なんて物は必要ない。

いや、すでに最高の物が武装済みだ。

「いらねえよ、そんな無粋なモン！ 分かかってんじゃねえか、束さん。最高だ！」

『もっと褒めて褒めて』

逃げて逃げて逃げ回る。

無様ではあるが、今は雌伏の時だ。

我慢して、我慢して、一気に決める——！？

「戦闘中に余所見とは余裕ですわね。それが命取りですわ！」

いつの間にか、俺の進行方向に侵入してきているオルコット。

何だ、どうした。どうするつもりだ？

その馬鹿でけえライフルで俺をぶん殴るつもりなのか？

逆にチャンスだ。空に浮いてさえないんだったら、最速で蹴り飛ばす！

「——うおらあ！」

速度をそのままに、飛び上がる。

目指すは青い雫。このまま蹴り穿つ！

——その時だ。

俺はオルコットがニヤリと笑ったのをその目で見た。

「ふふん。やはり単純ですわね。ブルー・ティアーズが四機だけだと思いませんか？」

迫る俺の前にいきなり現れる二機のビット。
そこから放たれるのは——ミサイル！？

おいおい、マジかよ。流石の俺もこのスピードからの回避は不可能だ。

この女、レーザーを使って俺のことを自分の前までおびき寄せやがった。

迫るミサイル。それはそのまま俺を爆散せしめようと肉薄し――。
――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

その言葉が聞こえると同時に、辺りは爆風で土煙へと包まれた。

「……終わりですか。まあ、素人にしては中々頑張ったようですが、このセシリア・オルコットに勝つには力量が足りなすぎたようですね」

「おいおいおいおい、勝手に終わらしてんじゃねえよ。速いのは良い事だが、仕留めていない相手に大してそれじゃあいくら何でも速すぎるってモンだろう？」

「な――っ!?!?」

俺が横から声を掛ければ、オルコットは信じられない物を見るような目を俺に寄越した。

そりゃあ無理もない。あのタイミングから抜け出すなんて奇蹟でもなけりゃ不可能だ。

まあ、俺が何をやったかと言えば簡単だ。ただ途中で宙を蹴って移動しただけ。

『空間固定能力、とでも言えば良いかな。この天才美少女束さんがA I Cを更に発展させて作ってみた物だよ? ……ただまだ試作段階を抜けないから出来るのは足場を作るくらいで、私としては最終的に防壁を作れるようなレベルまでにはしたいんだけど。ま、その子にはお似合いの装備でしょ?』

「確かに」

「え……? ふあ、ファーストシフト!? あ、貴方今まで初期設定だけの機体で戦っていたのと言うの!?」

「ああ、俺としたことが待たせるなんてとんでもなく遅い行為をしちまったな、オルコット。まずは詫びを入れよう。そしてここからが本番だ。精々ついてきやがれよ?」

「くっ——!?!」

急ぎ、空に飛び上がろうとするオルコット。
しかし、しかしだ。

——逃がすとも思っているのか?

「——きゃあ!?!」

いきなり真上からの衝撃。

結構な威力に真下へと吹き飛ばされる。

しかし、地面に辿り着く前に追撃。

真横、右下、左上。ありとあらゆる場所から衝撃が折り重なるように彼女へと響いていく。

絡繰りは簡単なんてもんじゃない。ただの超スピード。それだけだ。もう此所に俺が走れない空間なんて物はない。

猛攻に耐えきれず、彼女は苦し紛れにミサイルを放つ。

そいつに当たるわけにはいかない俺は、一度彼女から距離を取った。

再び空へと舞い上がる青い騎士。

満身創痍でありながら、まだ勝利への執念は捨てていないらしい。

良いじゃねえか、セシリア・オルコット。諦めは悪ければ、悪い程好感が持てる。

全ビット射出。再び弾雨が降り注ぐ。

「束さん。今日の天気は？」

『本日の天気は快晴。ただしところによって光の雨が振るでしょう』

「ふむ。傘を持ってきたねえんだが、どうすればいいかな？」

『そんなの聞くまでもないでしょう?』

「成る程。それはこういうことか? 最速で——」

『つつきちゃえ!!』

「上等!」

加速。

空間を固定した足場から、多角形を描くように飛び退っていく。

「な、何故、何故当たらないんですの!?!」

彼女は驚きの声を上げた。

俺は静かに唇を釣り上げる。

おいおいおいおい、俺が何回言ったと思ってるんだ。

言っただろう? 俺は最速だってなあ!

最速を相手にするにはテメエにはあまりに足りなすぎる物がある!

「足りねえ、足りねえぞお!」

溶けたバターのようにまとわりつく空気。

身体にかかる重すぎるG。

正直キツイ。しかしこれがあの男のしている景色に最も近い物だと俺は実感している。

「セシリア・オルコットオ！ テメエに足りない物！ それは！」

ならばこれに耐えず、何とする。

これくらいのきつさに耐えきれねえようじゃあ、あの男には追いつけない。

走って走って走り続け、やっと見つけた最速への切符を俺は今その手に掴んでいるのだ。

「情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！ そして何よりもオ——！」

超える。

オルコットの頭上に躍り出る。

しかし本当に超えるのはこの遙か先。チェックポイントくらいは軽々と通過せねば、面目すら立てられない。

「——速さが足りない！ 喰らえ、衝撃のお——！」

『ファーストブリットオ——！！』

「きゃあっ——!!?」

青い雫は、流星となって地上に降り注いだ。

敵影、完全な沈黙を確認。

そして何より信じられねえのが——。

『すっげー。初めて言っちゃたよ。東さん何かすっごいすっきりしちゃった!』

……この尾、美味しいとこ持って行っちまいやがった。

5. 『俺とコイツとあの人と』(後書き)

投下。

お気に入り登録が増える増える。

少しびびっちまったぜ。

6, 『壁』(前書き)

予告通り更新。

一夏対直道でお送り致します。

6, 『壁』

さて、常日頃から最速を自負するこの俺だが一つ、たった一つだけ俺が一夏の奴より遅い事象が存在する。

目の前で繰り広げられる一夏とオルコットの円舞^{ワルツ}

一夏の奴が手を開いたり握ったりし始めたのを見て、俺は長年の経験からこの後起こる事態を何となくは予測していた。

案の定、中々の速度を出しオルコットへと迫った一夏はゲージが足りないのに必殺技を発動。エネルギー切れで敗北を喫した。

爆笑したい気分を隣の千冬さんに封殺されながら、しかし俺は一夏が堕ちた瞬間ある予感が過ぎるのを感じていた。

……全くの余談だが、一夏と暫く過ごした男友達はある特殊能力を得ることが出来る。

ある意味最速の男、一夏が女を落とした瞬間が分かるようになるのだ。

もうそれはニュータイプばりにキューピート。

今頃、弾の奴も感じていることだろう。そして激昂していることだろう。

またか、またなのか、と。

まあ、アイツがモテないのは残念ながらそのがつつき具合が問題なわけなのだが。

……それにしても、今回は速いな。

試合を見ていた限り、特にあいつに惚れるような出来事はないよう

に感じたのだけど、負けてるし。

オルコットが追い詰められた瞬間に、ピーンと来たのだが一体何が
あったというのか。

もしか、マゾなのか。追い詰められてキュンと来てしまったのか。
マゾなんだな、セシリア・オルコット。

俺はR・G・Sの待機状態であるサングラスを目に掛け、空を見て
感慨深げに呟く。

「四人目……か——ってあぶねえ!？」

「なにか言ったか、久我？」

「どうした、直道。今、何か呟かなかったか？」

「ど、どうしたんですか？ 織斑先生も篠ノ之さんもいきなり久我
君に殴りかかるなんて……？」 け、喧嘩は駄目ですよ」

「いや、山田君。なんかこう、アレだよ。分かるだろう？」

「ぜ、全然分からないんですけど……」

こ、コイツら……。聞こえてもないのに俺の呟きに反応して来やがった。何つー速度だ。

こと女関係に置いて、アイツ以上の速さを持つ奴を俺は知らない。そして驚くべき事にアイツは周りの女を加速させることが出来るのだ！

もう一夏が絡んだ時の女共の速さと来たら、俺を凌駕しかねない程だ。

……チッ。何時か刺されねえかなアイツ。

そう思いつつ、俺はスツとアフリカ旅行のチラシを千冬さんの前に突きだした。

「……なんだ、コレは」

「そろそろ考えといた方がいーんじゃねえんですか？ 移住」

「何でアフリカなのか言ってみろ」

「イスラム圏じゃ、嫁は四人までらしいですよ。足らないでしょ？」

「一体、お前は、何の、話を、して、いる……！！！」

「いてえいてえ！ 離せ、離して千冬さーん！」

……とんでもない握力で頭を握りつぶされるところだった。
全くブラコンはこれだから困る。

「ツツーわけで、俺と弾への詫びも込めてその雪片で腹かつさばけ」

「どういうわけだ!？」

「いーから、さっさと臓物をぶち撒けろよ。ハリーハリーハリー！」

「だから何でだよ!？」

何でだよ、ときたもんだ。全く、呆れて呆れて呆れかえるね。
そりゃあ勿論――。

「――俺より速い存在が存在して良いわけないだろ？　あと全世界の恵まれない男子の心境的にも」

「何の話か全っ然わっかんねー！」

分かれよ！

――とまあ、一夏との戯れはさておき。

現在再び、第三アリーナ。俺はR・G・Sに乗り込んで、一夏と相対していた。

そう、これはあくまでクラス代表決定戦。あの金髪マゾを倒してお終いなんてお話じゃない。

そう言えば、初めてだな。そう思って俺は一夏に再び声を掛けた。

「そう言えば、お前と喧嘩するのは初めてだな。一夏」

「……そうだったっけ？　ああー、そう言えばしたこと無いなあ。つーか厳密に言えばこれも喧嘩じゃないんだけど」

「細けえことはいいんだよ。まあ、思いっきりやろうぜ」

「……応！」

『試合開始！　です！』

真耶ちゃんの声が聞こえた瞬間、一夏の懷に飛び込む。

俺たちは近接特化同士。その戦いは当たり前のように泥臭い。殴り、蹴り、切り刻む。あるのはそれだけだ。

「速っ！？」

「喋ってる暇があんのか、一夏あ！」

「――グウツ！？」

蹴り飛ばす。

一夏は吹っ飛ぶが、壁にぶつかることなく、そのまま宙に浮かび上がる。

それにしても、結構強めに蹴ったにしてはシールドへのダメージが薄い。

蹴った時もあまり手応えがなかったような……。

「！　成る程お、そう言う事か、一夏！」

――あの野郎、俺の蹴りと同じ方向に飛びやがった！

流石、世界最強の弟と褒めておくべきか？ 中々、やりやがる。
一夏は空に浮かびながら、俺へとその剣の切っ先を向けた。

「へっ。初めてのお前との喧嘩だ。簡単に負けてやるわけには行かないぜ！」

「はっ。面白れえこと言ってくれるじゃねえか。だが沈め、最速で！」

「やってみろよ、直道ィ！」

「来おい！ 一夏ぁ！」

白い落雷が俺を切り裂かんと空から落ちてくる。
これだけは、初めの一撃だけは避ける気も起きやしない。
落ちてくる稲妻に向かい、俺は足を突き上げた。

——そして衝突。

辺りに響く、金属同士の衝突音。今、俺たちのゴングが鳴り響いた。

両者共に弾き飛ばされ、仕切り直し。

だが、誠に遺憾ながら飛べるアイツは空中で体勢を整え、俺より速くこちらへと向かってくる。

——生意気なっ！

「おおおおおおお！」

振るわれる幾つもの銀閃。

縦、袈裟、逆袈裟、振り上げ、胴、逆胴、突き。

何年も剣道から離れていたとは思えない、しっかりとした太刀筋。

そう言えば、箒と特訓していたんだったか。成る程、愛の成果なわけだ。

——だが。

——だがしかし。

俺と相棒に向けるにはちよつとばかり——。

「おっせんえだよ！」

手甲で逸らし、身体を傾け、ついでにしゃがむ。

数多の迫り来る銀閃を避けきり、しゃがんだ体勢から後転気味に頭の後ろで手を突く。

そしてそのまま、雪片を上段から叩き込もうとする一夏に——！

「——おらあっ！」

「——ッ!? チッ!」

——両足を突き上げる!

確かに捉えたはずが、またしても手応えは薄い。さっきよりも深いのは確かだが、一夏を倒すにはまだまだ足りない。

それにしても良い反射速度だ。いや、俺のダチが遅いわけがない、か。

しかし、それならば。

反射も出来ない速度で、攻撃を叩き込む!

ギアを、一速から次に上げる。二速、三速なんてそんなとろい速度の上げ方はしない。そんな遅い事は教わった憶えもない。

一気にトップギア。空間固定能力——次からはSpace Fixation ability とでも呼ばせて貰おうか——を使い、一夏の前後左右あらゆる空間を跳び回る。

「クソ! 捉えきれないっ!?」

一夏が俺をその目に捉えようと視線を巡らす、向けた先には俺は既 に い ない。

速度だけを追い求めたR・G・Sの真骨頂。超高速機動からの超高速攻撃。

一夏の死角へと潜り込み、殴りつけ蹴りつける。

「グウツ……！？」

攻撃を加えられたところを見ても、そこにはもう誰も居ない。

辺りを飛び交う影だけが、一夏の視界の中に見える俺の残滓。

しかし一夏も黙っちゃいない。跳び回る俺の影、そのおおよその進行方向へと刃を振るう。

だが、しかし。

「そいつは残像、だ！」

刃を振るったことで出来る、特大の隙。

俺はそんな物を見落とす程甘くはないし、何より遅くない。

「喰らえッ！ 衝撃のお、ファーストブリット！ ——何イ！？」

「へ、へへっ。やっと捕まえたぜ、直道！」

一夏に当たった俺の足は、信じられないことに一夏の手によって掴まれていた。

吹っ飛ばずに堪えたのも予想外だが、何より体勢がヤバイ。

真逆、コイツさっきのはこれを狙って——！？

「肉を斬らせてえ——！」

「——！？」

「——骨を断つ——！」

振るわれた雪片を何とか手甲で受けるが、俺はその威力で吹っ飛んだ。

空中で一回転をして、着地する。勢いを殺しきれずそのまま地面を少し滑った。

シールドのエネルギーが大幅に減っている。唯一の弱点が今、露呈したことを俺は感じた。

そう、このR・G・S唯一にして絶対の弱点。それは——。

「ん？ 片手で振った割にはダメージがでかいみたいだな、直道」

「……んだよ。言いたいことがあるならさっさとさえ」

「ああ、分かった。装甲薄いんだろ、お前のIS」

「……ふん」

——そう、装甲の薄さ、だ。

速さを極めるには、重い物を捨てる必要があるだ。

極限まで軽量化されたR・G・Sのボディは、正直言って紙同然。

丈夫なのは、殴る為の手甲と蹴る為の脚甲のみ。それ以外の箇所では受ければ、必然ダメージはでかくなる。

しかし、しかしだ。今更装甲を厚くするかと聞かれれば、俺は首を振るだろう。

防御？ 装甲？ そんな物は遅い奴らが考えることだ。

避ければ、躲せば、つまり速ければ敵の攻撃などそもそも喰らわない。い。

詰まったところ——。

「そんなもん俺が速けりや関係ねえだろうがあ！」

「来い！ 次こそ捉えきってやる！」

「やってみやがれ！」

加速、加速加速。

風も音も、その全てを置き去りにするようなそんな速さ。数多の蹴打を加えるべく、俺は一夏に迫った。

だが、アイツもさっきの応酬で何か掴んだのか、攻撃が加わった瞬間にその方向へと剣を振るう。

掠っただけで少しずつ、シールドエネルギーが減っていく。だが一夏は完璧には俺を捉えきることが出来ない。

そして、俺も。決定打となる一撃はまだ放てない。一撃でコイツを倒せねばさっきの二の舞だ。

俺も一夏も相手に止めを刺すには至らず、そして――。

俺も一夏もシールドエネルギーが残り僅かとなった頃、俺は一夏から百メートルほど離れた場所に降り立った。

「？ どうした、直道。もう終わりか？」

「うっせえ。ほざいてろ。だが一夏、初めての喧嘩なんだ。最後くらい、真っ向からやり合おうじゃねえか」

相対。

一夏のからかいを含んだ声にそう返す。
それを聞くと、一夏はその顔を愉快そうにニヤリと歪めた。

「いいな。そういうのは嫌いじゃない」

「だろ？ 俺もだ」

「だが負けてはやれないぜ、直道。二度も千冬姉に恥をかかせるわけにはいかないからな」

「俺だって負けられねえな。あの男に誓って」

いくら親友でも負けてはやれない。

俺にも、そして一夏にも譲れない物が存在する。

——ならば、ならばコイツは、そして俺は目の前に立ち塞がる壁に他ならない！

「テメエが俺の前に立ち塞がる壁だと言うのなら——」

「直道が俺の前に立ち塞がる壁だって言うのなら——」

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力発動——！

ピットの地面がいきなり消え失せる。

IS『R・G・S』の単一仕様能力。『ALTER』^{アルター}。

ただそれはアニメのように何かを生み出す為の物ではない。

効果は自分の周囲にある物質の強制量子化。そして吸収、圧縮。

それを背面から解き放つだけのなんとも簡単な機能。

光り輝く一夏の雪片を前にして、俺は圧縮したそれを解放せんと最後の言葉を放つ。

「――最速で蹴り穿つ！」

「――真っ向から切り開く！」

背中から、緑色の粒子が半端じゃない勢いで吹き出す。

そして得られるのは、圧倒的推進力！

流石俺、単一仕様能力すらも特化してやがる、と内心笑みすら浮かべつつ、俺は目の前の男へと突貫する。

「壊滅のお――！」

「零落ウ――！」

嗚呼、今なら風も音も、光も。もしかしたら神さえも超えることが出来るかも知れない。

しかし、俺が目指す先はそんなものでは済みはしない。

そして、そこに至るためにはまず目の前のこの壁を碎かなければ！

「――セカンドブリットオ!!!!」

「――白夜ア!!!!」

Side 一夏

「おい、大丈夫か。生きてるか、一夏くん」

「……まあ、腹が痛いけど何とか」

「そりやお前、ぶち抜くつもりで蹴ったしなあ」

「お前は俺を殺す気だったのか……？」

「何言ってやがる。お前だって俺のこと真っ二つにする気だっただろうが」

「……まあ、確かに。」

気絶でもしていたのか、俺は未だにブーツとする頭で差し出された手を取った。

その手の主は、最速を信条とする親友。久我直道。

ある時分から、最速最速と騒ぎ立てるコイツのことが俺は嫌いじゃない。

コイツはただ口だけではなく、いつも努力していたのを俺は間近でずっと見てきたのだから。

……その犠牲者も間近で見えてきているが。コイツにトラウマを植え付けられた人間は存外多い。

まあ、それはおいておくとして。

此所で俺が寝ていたと言うことは――。

「……俺負けたのか」

――ああ、こんな事では千冬姉に申し訳が立たない。そう思った俺に掛けられたのは意外な答えだった。

「いや、俺の負けだ」

「は？ ……いや、でも俺はこうやって気絶を」

「ふん。むかつくことにお前の刃は俺に届いてたさ。試合結果的には引き分けだ」

「じゃあ、なんで？　引き分けではあったもお前の負けではないだろう？」

「――ハッ」

そう言ったら鼻で笑われた。

……なんか、むかつくな。

「あのとき出したのは、俺が今出せる最高の速さだった。それに触れられた時点で俺は最速じゃない。だから俺の負けだ」

「……お前は何っ―かすごいよなあ」

「すぐくはねえよ。まだ遅い」

それだけ言うと、直道は後ろを向いて歩き出した。

俺はまだ完全には身体が動かないので追うことも出来ない。

「どこ行くんだよ？」

「あ？ 帰る。帰って特訓だ。ふん、まだまだ道程はなげえつてこ
とさ」

そのまま振り向くことなく歩いて行く直道を、俺は黙って見つめて
いた。

全く、これだから嫌いになれない。

何かにひたすら向かっていく人間は男から見ても格好いい。

何時か、俺もコイツみたいに夢中になれるものを見つけられればい
いと改めてそう思う。

すると、直道は途中で振り返って俺に笑顔を見せつけながら、その
口を開いた。

「まあ、またやろうぜ、一夏？」

「——おうっ！」

――次こそはコイツをブッ倒してやろうじゃないか。

6, 『壁』 (後書き)

更新更新！。

感想ありがとー。ちゃんと読んでますよー。

7. 『誰がために鈴は鳴る』 (前書き)

七。投下。

7. 『誰がために鈴は鳴る』

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですね！」

「え？」

代表決定戦翌日。朝のSHRで教壇に立った真耶ちゃんの言葉に、一夏が呆けたような声を上げる。

あの馬鹿は言葉が理解できていないように呆けている。全く、何回言わせる気か分からねえが、アイツはまだまだ速さが足りない。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺、昨日の試合セリアに負けた上に、直道とは引き分けだったんですけど。何で俺が選ばれてるんですか？」

……コイツ、いつの間にかオルコットを下の名前で呼んでやがる。流石、俺の認めた最速——女に手を出すのだけは——の男。評価を

若干改める必要がありそうだな。

俺は一人寂しく、最速になるための特訓をしていたわけだが。

御陰でISの部分展開が可能になった。……脚部限定で。

他のところはとう頑張っても出来ない。流石、高等技術と言われるだけはある。

まあ、そこはかたなく束さんの細工がしてありそうな予感はあるが。多分このIS、脚部しか部分展開できない。

しかし、敢えて言っておこう。

——グッジョブ、と！

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

俺が感動に浸っていると、後ろから声が聞こえた。

件の垂れ目マ——失敬。もう一人の対戦相手、セシリア・オルコットだ。

何でコイツ、ポーズなんかとってやがるんだ？

馬鹿なの？ 死ぬの？

そんな無駄な動作は、速い人間だけに許される行為だろう？

——俺はこう思っている！ ポーズ。それは自己を確立させる為、

己を誇示する為、そして何より最高に格好いい自分を知らしめる為の行為だ。だがしかし、だがしかしだ！ 現実で態々敵がそんなとろいことをやっている人間を戦隊モノの敵キャラ、もしくは仮面ライダーの悪役のように待っていてくれるだろうか？ イヤイヤ、そんなことはない。己の前に敵が出た以上、最速でぶちのめすに決まっている！ どの世界にそんな格好をつけて悦に浸っている奴をのんびり見ている馬鹿がいる！？ そうポーズとは無駄な行為だ。自分の速さを遅らせるとんでもない行為と言っていないだろう。しかしそれにどうしようもなく憧れるのもまた事実！ ならばどうすればいい？ 答えは簡単だ。最速でポーズを取り、最速で戦闘に移行する。そうすれば敵にその隙を与えるような馬鹿なことにはならないし、自分の思う最高に格好いい姿を敵に見せつけられる！ つまりポーズとは速さを持つ人間にだけ与えられた、いわば最速の特権なのだっ！――

「まあ、勝負は貴方の負けでしたが、しかしそれは当然のこと。何せ貴方はIS初心者の上、相手がわたくしセシリア・オルコットだったのですから」

――ちなみにこの間、十秒な。

それにしてもまだグダグダ喋ってやがる。この金髪マ――失敬。もといマゾロールめ。

言葉は簡潔にしてこそ意味がある。回りくどいことなどに意味はない。

声を掛けられた一夏はと言えば、実際負けているから何も反論が来ずにいる。

だが、俺の視線に気付いたのか、一夏は蜘蛛の糸でも見つけたカンダタの如く顔を輝かせた。

「先生！ 直道がいるじゃないですか。アイツ、一人だけ負け無しだし！」

「えーっとお……。あの、その、久我君は駄目なんですうー……」

「何で!？」

「——ひうつ!？ あのお、実は昨日お……」

（回想） （またの名をバッドトリップ）

『久我君、クラス代表のお話なんですけど』

『おおっと！ 先生、良い夜ですね。良い夜だとは思いませんかあ？』

『へっ？ ……そうですね。今日は月が綺麗ですから』

『そうでしょう！　そうでしょうとも！　こんな夜は美人を誘ってドライブに行きたい気分になってしまうと、そうは思いませんか？』

『あっ！　良いですね！　……でも、私誘ってくれる人なんて居ないし』

『何？　それはもったいなあゝい。……でしたらどうです？　俺と夜のドライブなんて』

『――え？　だ、だだだ駄目ですよ！？　私たち先生と生徒だし、そ、そんなことお……。そ、それに久我君は車、運転できないんじゃないですか？』

『ハハハ、そこら辺は言葉のあやですよ。まあ、少しぐらい外を散歩するくらいはいいでしょう？』

『そ、それだったら……』

（少女（生け贄）移動中）

『わー、本当に良い夜ですねえ』

『でしょう？　よっと』

『——わっぷ!?! え、えええ、何で私は久我君に背負われてるんですかあゝ!?!』

『脚部限定! ラディカル! グッド・スピリット!』

『へ? 何何々? く、久我君! 許可無しでのISSの展開は——』

『ヒイイイイヤツフー——!』

『——きゃあっ!?!』

『車じゃなくて申し訳ありませんが、俺はこう思うんだよ、真耶ちゃん! 運転するなら助手席に女性を乗せるべきだと。密閉された空間、物理的に近づく距離、美しく流れるBGM。身体だけではなく二人の心の距離まで縮まっていくナイスなドライブ! 速く目的地に行きたい、でもずっとこうしていたい、この甘美なる矛盾! 簡単に答えは出ない、しかしそれに埋もれていたいと思う自分がいるのもまた事実!』

『——っ!?! こ、こここ恐いですゝ! (思いつきり直道に抱きつく)』

『――！ オオオオオオ！？ ファンタスティーーーーック！！』

〽一周後〽

『え、えぐっ。……き、気持ち悪いですうー』

『アレ？ 何の話しに来たんだっけ、真耶ちゃん』

『く、クラス代表の……』

『一夏で良いんじゃないですか？』

『い、いえ。一人だけ負けていない久我君に頼もうかな、って。っ
うー』

『走り足らないなあ。どうです？ もう一回』

『い、いえっ！ いいですッ！』

『クラス代表、一夏でいいですよね？』

『でもお……』

『どうやら語り合いが足りないみたいです。もう一周行きましょうか!』

『……………織斑君にします』

『成る程お、残念だなー』

く回想終了く

「この外道めっ!」

「オイオイ、人聞きが悪いなあ、一夏あ。俺は誰よりも真っ直ぐ走る男だぜ?」

一夏が憎々しげに俺を睨むが、知ったツこっちゃあない。俺はただ、美人な先生とドライブしたただけだしー。

あと、後ろの。キラキラした視線を俺に送るんじゃないぞ。お前の期待に応えられる程、俺はハードな性癖はしていないぞ。

——で、勿論飛んでくるチョーク。

「——アアン♪」

「千冬さーん。席替えしようにぜ、席替え。俺の精神衛生的にも」

「貴様、副担任を虐めるとはこういう神経をしている！ それと織斑先生だ！」

「——あうん！」

……全く、俺は何も悪くないと思うんだがなあ。
最速で最速の危機回避を実践しただけだろうに。
ああ、速さとはこうも理解されにくいモノなのかあ。

「——ふあっ！」

「少しは反省した態度を見せろ！ 馬鹿者！」

「サーセン」

——で、四月の下旬。グラウンド。

桜とは素晴らしい。あの最速で散っていく様には共感すら憶える。日本人はあの刹那さに、美しさを憶えるのだ。つまり、速さは美しくもある。

そんな事を思いつつ桜を眺めながら、俺は首を少し斜めに傾けた。

「——あんっ！」

……それにしても、この子いつも俺の後ろに陣取ってるな。

そんなにチョークが欲しいのか。このいやしんぼめっ！

つか、グラウンドまでチョーク持ってくるのはどうなのだろう、千冬さん。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践して貰う。織斑、オルコット、久我……は飛べなかったな。とりあえずお前はISを展開して立っている」

——苛めかっ！

と、そんな戯言を考えつつ、ISを展開。常日頃から額の上に掛けている相棒が俺の身体に纏わり付く。

「織斑、何をしている。さっさとISを展開しろ」

「は、はい！」

促され、ISを急いで展開する一夏。

まあ、それなりの速さでISを装着すると、千冬さんから命令が飛ぶ。

いやあ、端から見ても命令する姿が実に堂に入っている。根っこから上に立つ人間なんだろう。

「よし、では飛べ」

飛び上がる青と白。上を見上げる俺とその他生徒。

……俺がISを装備した意味はあるのだろうか。マジで何もすることがない。

遙か上空では、一夏が第四婦人といちゃいちゃしているのが何となく感じ取れる。

——落ちて死ね！

と思っていたら、急降下と完全停止を命じられた一夏が、結構な速さで下へと加速を始めたと思ったら地面に刺さる。

——ざまあ。

まあ、結局速さというのは制御できなければ諸刃の剣だ。最速を名乗るのにはそれを御しきる必要があるわけで。

つまり一夏にはまだ速い。ブレーキが壊れた車は欠陥品だ。そんなものに乗ってたら死にしまう。

まあ、俺はそんな間抜けな真似はしないが。

「全く……。では次に武装を展開しろ。織斑、何を呆けている。やるならさっさとやれ」

ここに至っても、武装のない俺はすることが無い。
やっぱり苛めだろ、これ。

所在なさげに体育座りしていると、いきなり話しかけられた。

「ん？ どうしたの、なおちくん」

「ああ？ えー、あー、んう？」

「あゝ、クラスメイトの名前憶えてないなんて酷いんだ。私、布
仏本音だよ？」

「へゝ、そうなのか」

「うんゝ。そうなんだよ？」

――なんだ、この遅い物体は！

正にスロウリイ！ なんつーか見てると眠くなる遅さだ。

こう、俺の存在意義的に認めづらい生物だなあ。

とりあえず、脇に手を入れて持ち上げてみる。

「わあゝ？ なになにゝ？ どうして私のこと持ち上げるのゝ？」

「んゝ？ まあ、何となく」

しっかし和む。

アレだ。クーガーの早口まとめ見てる時くらい和む。

――えっ？ 俺だけ？ うっせえ、馬鹿！

何とはなしに肩車に移行して、布仏を装備完了する。なんかこう呪
いのアイテム的な気分で。

ああ、速度が下がる！

――授業が終わるまでその体勢でした。いやあ、癒されたわ。

夜。既に夜だ。

いつもの如く、校外三周という世界を縮めた俺はそろそろ門限がやばいので寮へと戻っていた。

しかし布仏には何時か速さの素晴らしさを説く必要があるな。そう思ったその時だった。

正面ゲート前に、ぴよこぴよこ揺れるツインテールが見えた。その瞬間、俺の中の一夏センサーが音を立てる。

——真逆、アイツは!?

最速で追いつき、後ろからその小柄な身体を改造制服によって開いている脇から持ち上げた。

「——ひゃわぁ!？」

やはり聞き覚えのある声がする。

——コイツやはり！

「お前！ ……？ ——！ そう酢豚！ 酢豚さんじゃないか！」

「——あ、アンタ！？ 直道！？ って言うか何でアンタがその話知ってんのよ！？」

持ち上げたツインテール。それは俺の幼馴染みであり、一夏のセカンド嫁凰鈴音だった。

いや、俺もコイツには一目置いているのだ。

真逆、中二でプロポーズとは物凄い速さだった。あまりの速さに感動した覚えがある。

——そして、何故俺がそれを知っているかと言えば。

「そりゃあ、お前。お前らの斜め後ろの柱の所で聞いてたからだよ」

「偉そうに盗み聞きの報告するんじゃないわよ！」

俺に持ち上げられたままの体勢で、器用に蹴りを放つ鈴。
しかし当たらない。

「何で当たらないのよっ!？」

「フハハハ、お前もまだまだ速度が足りん！」

「うっさい! この速度狂め！」

褒め言葉にしか聞こえん!

……つかコイツ、不憫な話育ってねえなあ。箒は伸びて膨らんだのに。

なんつー見事な直線を描いてやがる。まあ、成長も早いに越したことはないという——!？

「蹴りの速度が上がったぞ!？ どうした、何があった!？」

「アンタ、今余計なこと考えたでしょう！」

「んなことねーよ。それも一種のステータスだろ？」

「死ねッ！」

——更に速度が上がった、だとお！？
そろそろこの近距離だとやばいので、この猫じみた幼馴染みを投げ捨てることにした。

常識と幼馴染みは投げ捨てるものだと相場が決まっているのだ。

「そおい！」

「——きゃあ！？」

そしてすぐに戦線離脱！

後ろから聞こえる罵詈雑言の嵐を無視して、俺は部屋へと駆け戻った。

そして、部屋に着いた頃。俺の一夏センサーにまたしても電撃が走る。

「修羅場、か。生きて戻れよ、一夏っ！」

いや、まあ常々俺はアイツが一度死ぬべきだとは思っているけどな。

7. 『誰がために鈴は鳴る』 (後書き)

七話です。投下。

お気に入り登録が百を超えた。感謝！。

8. 『鈴は鳴らず、ただ地に墮ちる』 (前書き)

八。

8. 『鈴は鳴らず、ただ地に堕ちる』

「……いや、だからよお。本音、お前俺の話聞いてた？」

「聞いてたよ？」

「それで得られた教訓は？」

「ん〜。速いって事は素晴らしい〜」

「生かせよっ！」

夕食時の食堂の中、俺はただただ自分の無力さを噛みしめていた。まあ、噛みしめたところで腹は膨れないわけだが。

一夏の代表候補決定のお祝いパーティー。その最中とろとろと彷徨い、もそもそと食い物を食べる地上最遅の生物を見つけた俺は、すぐさまそれを確保したわけである。

……全く、いきなり抱え上げられても出る言葉が「あ〜。なおちんだ〜」なのだから目も当てられない。

多分、ジャングル辺りに逃がしたら最速で捕食対象になること間違いないナシの生物、布仏本音。

これは速さの真理というものを教え込まねばならない、と最速故の使命に駆られた俺はこうして対面に本音を座らせ、俺が得た速度の全てを教え込み始めたわけなのだが……。

——全ッ然、意味が感じられねえ!?

いや、話を聞く本人は多分真面目に聞いているし、こちらの質問にもしっかり返してくるのだが、如何せんやはり遅い。

何というか、馬の耳に念仏、糠に釘。ついでに言うなら、カズマに説法、一夏への恋心の如しだ。 ※総じて意味の感じられないこと。

「……直道。お前、のほほんさんと友達だったのか？」

「あゝ。おりむーだゝ」

「おう、おりむーじゃねえか。聞いてくれよ、今コイツに速さとはなんたるかを説いてたんだがよー」

「お前がおりむー言うな！ ……つーか直道、お前なんて無謀なことを。諦めろよ」

「諦めろよってお前、オイオイ何を言ってるのか分かってんのか、一夏？ そりゃあ、何事も速いことに越したことはない。だが一部を除いてコイツは別だ！ 諦めるのが速ければ確かにもう一度それをやり直すにしても、違うことをするにしても選択肢は広がる。成る程、諦めるのが速いって言うのはいいことだ。だがそれで良いのか？ 諦める、それは自分の歩んできた道を捨てるということだ。そして道を捨てるということは自分を捨てるということと同義だ、違うか？ ならば諦めは悪い方がいい。泥に塗れようが、誰に罵倒されようが、何かに躓こうが、諦めることなく走り続けられればそこに何時か辿り着ける！ どんなことでも一歩一歩確実に歩むことが大切なんだ。だから俺はやらなければならんだ！ 本音え！ もっかい最初ッからだぁ！」

「おー！」

うむ。返事だけは素晴らしい。おせえが。

どう見ても長すぎる袖をぶらぶらと揺らしながら手を上げる本音。

……走る時、邪魔そうだな。まずこれを切り取るところから始めるか。

――で、翌日。

昨日は写真撮影やら新聞部やらあったようだが、俺は本音に延々と速さについて説き続けていたので、正直そっちには参加していない。

まあ、大して効果はなかったわけだが。ちなみに袖も短くできなかった。

しかし、大事なのは毎日の積み重ねである。俺は速さの伝道師としてそれをやる義務が在るのだ。

「おっす。おはよう、直道」

「おう」

途中で一夏に声を掛けられ、そのまま二人で教室へと向かう。

「織斑君、久我君。おはよー。ねえ転入生の噂聞いた？」

「おーっす」

「おはようって、転入生？ 今の時期にか？」

「うん。何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

ああ、酢豚のことか。

いつの間にかあの女、代表候補生なんて大層なもんになってやがるとは。全く人は見た目に寄らない。

全然成長してねえかと思えば、妙なところで成長していやがる。もうちょっと別なところを成長させろよ。あの残念体型め。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

……出やがった。

この金髪、最近一夏に気があるからか妙に近くによって来やがる。そのアプローチの素早さだけは褒めてやってもいいが。如何せん、相手が相手だ。

案の定、一夏の奴は気付いてやがらねえ。ああ、不憫だねえ。

つーか、存在を危ぶんでって素人二人にほぼ負け越しのような有様の代表候補生様の何を危ぶみゃいいんだ。教えてくれ。

「直道さんもそう思いませんか？」

「うるせえ。このちよろコットが」

「ちよ、ちよろっ！？ 聞き捨てなりませんわ！」

「だから抱えてろっつーの。つーか何名前呼びに自然に移行してんだ、テメェは」

「く、クラス代表を争った身として敬意を表しているだけですわ！ 貴方も一夏さんのようにセシリアと呼んで頂いて構いませんわよ」

「あーあー、あんがとよー。ちよろリア」

「ちよ、ちよろ！？」

ちよろちよろうるせえ。鳴き声か何かか。

つーか、アレだろ。一夏だけ急に名前で呼び出したら邪推されちま

うからその予防策か。

汚い。流石ちよろコット汚い。

顔を真っ赤にして訂正を求めてくるちよろ——セシリアを適當にあしらいつつ、いつの間にか寄ってきていた箒と話している一夏へと視線をやる。

——！？ もう第一婦人が不機嫌顔だぞ！？ 一分もしないで女を怒らすとは流石一夏。コイツのこの速さにだけはかなわねえな。

ま、大方一夏が転入生が気になるとか漏らしたに決まっている。この学園に来るのはほぼ女のみだからなあ。箒もそんな事を訊けば面白くないだろう。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるというのに」

案の定である。

女心が微塵も分かっていない奴だ。まあ、そんな事を言う俺も大分怪しくはあるが。

「そう！ そうですわ一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。相手ならこのセシリア・オルコットが務めさせて頂きますわ」

「なっ！？ 待て、オルコット！ 一夏には私が教えてやるともう決まっている！」

「あら、篠ノ之さんが教えられるのは剣術だけでしょう？ ISについてなら代表候補生の私の方がいいのではなくて？ ねえ、一夏さん」

「どうなんだ、一夏！？」

「……えー？ 俺、直道に練習付き合って貰おうと思ってたんだけど」

そこで俺の名前を出す馬鹿がいるかつ！
向けられる殺気。溢れる嫉妬。不満と羨望を詰められるだけ詰めたような不快な視線が二対俺に向けられる。

……此所で妙なことを言ったら、俺は明日変死体で発見される可能性がある。まあ、最速で逃げさせては貰うが。
と言うか、まあ、大体にして――。

「――嫌だね」

「えー。何でだよ。直道」

男が口を尖らせるんじゃない。気持ち悪い。

「つーかそんな事分かりきったことだ。俺とコイツじゃ大した訓練なんざ出来やしない。」

「お前、よく考えてみろよ一夏。俺みたいな奴がそうそう居るわけもねえのに、俺と特訓して何が得られる？ 多分動体視力ぐらいだぞ？」

「ああー。それはそうかもなあ」

「だろーが。テメエの機体も大概狂ってるが、俺のISはそもそも武器さえないからな。俺とテメエでの戦闘なんざ、それこそ無意味だよ」

「うーん」

「それならまだ、剣道習うにしろ、中遠距離へ対応できるようにするにしろ俺より適任がいんだろーが。つーことで、ほれ」

「ん？ これは何なのだ、直道？」

そこまで話すと、俺は箒に一枚の紙を差し出した。
まあ、何の変哲もない普通の紙だ。
受け取った箒はそれをマジマジと眺めると、驚いたような表情を浮かべた。

「！ これは打鉄の仕様申請許可証か！？」

「まあ、な。こんなこともあろうかと先に申請して置いた俺を崇め奉るんだな」

「ず、随分と用意がいいのですわね」

「前から言ってるんだろうが。お前らにはまだまだ速さが足りない」

「お前、そればっかしだな」

うるせえ！ 締めんど、一夏。
嫁一号は機嫌が悪いと俺に愚痴るから、先にこうやって対策を立てて置いたんだよ。
他人の迂遠なのろけ話に付き合ってる暇なんて、俺にはないんだっつーの。

「ねーねー！ でもさ、今の所専用機持つてるクラス代表は一組と四組だけだから余裕だよ」

「――その情報、古いよ」

俺にとっては昨日訊いたばかりの声が聞こえ、俺やクラスの奴はその声の出处。教室の入り口へと目を向けた。
そこにいたのは、格好でもつける気だったのか片膝を立ててドアにもたれ掛かる、一夏の嫁二号。

……ヤベエ。なんつーかこれは――！

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないわよ？」

「あんまし格好ついてないぞ、チビ鈴」

「お、お前もしかして鈴か？ スッゲー似合わないからそれ止めた方がいいぞ？」

「あ、あんたたちいゝゝゝゝ！」

化けの皮が剥がれた。似合わねえことするからだよ。

それともうすぐ授業時間だぞ。いいのか、そんなところにいて。なんて噂をすれば影、だ。お約束なのでやらねばなるまい。

「おい。志村、後ろ後ろ」

「誰が志村よっ！」

「おい」

「何よ!?!」

ズバァン、と。

おおよそ、人体が出せるようなものではない音が響いて鈴の奴は悶絶した。

彼女の後ろにおわすのは、我らが大魔神。人類最強の鬼。範馬の系譜と揶揄される地上最強。織斑――。

「――あふん！」

「避けるなっ！ 誰が女版範馬勇次郎だ！」

「んな無茶な。つーかそこまで言ってねえです。大体、千冬さんは

どっちかというと列海王——」

「——ああ！」

「避けるな！」

だから無理を言うなっつーの。

そして席を俺が立っているにも関わらず、俺の後ろに何故かいる少女。

最近知ったのだが、名前は伍矛咲樹ごぼうさきと言うらしい。彼女について多くは語るまい。DMである。

鈴はと言うと、千冬さんを見て驚愕の表情を浮かべている。

そう言えば昔から苦手そうにしてたからなあ。まあ、嫁姑問題というのは今に始まったことじゃ——。

「——危ねえなあ、千冬さん。流石に出席簿投げるのはどうかと思いますよ？」

「嫌い」

「えー、何で掴んじゃうのかなあ。そこは私にキラーパスしてくれないと」

伍矛さん、マジ自重。ちょっと黙っとけ。

と、そんな気持ちを込めて視線を向けると、身震いし始めた。もう駄目かも分からね、この子は。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ、さっさと自分の教室に戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「は、はいっ！」

圧倒的ヒエラルキーの違いだ。そりゃあもう鯨とプランクトン。猫とライオンみたいな。

ぷるぷるとチワワのように怯えながら、教室への道を空けた鈴は、戻る前に一夏の方を向いて声を掛けた。

「また来るからね！ 逃げないでよ、一夏」

「さっさと戻れ」

千冬さんの冷たい声音にまたもブルリと背筋を振るわせた鈴は、そ

のまま帰るのかと思いきや、俺の方を見た。
なんだ。俺にも遂に愛の告白か？ 残念だが、あんまり子供っぽいのは好みじゃないんだが。

「直道っ！」

「あー？ んだよ？」

「――憶えておきなさい。後で殺すわ」

……何かしたか、俺。

底冷えるような殺気を向ける幼馴染みに、最近の女は全員読心術でも憶えているのかと不安に駆られる。千冬さんとかデフォだし。

なんにしても幼馴染みに向ける言葉じゃないよなあ。昔は、っていうか今も一夏とのことは応援しているつもりなのだが。

「……恐ろしいなあ」

「私たちの業界ではご褒美なんだけどな」

……だから黙れよ、伍矛。

晩。夜である。

現在、俺が使っている部屋で俺は一人静かに読書に勤しんでいる。
一日のノルマの走り込みを終えれば、後は大体こんな風に過ごしている。

何故か、同じ男子のはずの一夏は筈の部屋に居候しているのだが。
この前弾の奴にばらしてみたら、電話の向こうから殺気が漏れてきた。

……次の土日、家に戻ったら一夏は二度と帰ってこない可能性があるな。

リア充撲滅を掲げる友人にはいささか、含むものがあるのは確かだ。大体にして、俺は一夏のリア充促進派だし。

鈴ともうまくやってるかなー、と思考の片隅でちらりとそんな事を思いつつ、俺は『リア充の作り方』のページを捲った。

「直道っ！　な～お～み～ち～！　いるんでしょ！　開けなさいよ！」

「……あの馬鹿、しくりやがったのか」

ドンドンと、半端無い音を立てるドアの向こうから幼馴染みの苛ついた声が聞こえてくる。

正直相手なんざしたくないが、この本に書いてあった『出来る限り女の子の方はこちらでフォロー』と言う言葉に従って、仕方なくドアを開けに行く。

ドアを開けると、何故かボストンバッグを抱えた幼馴染みがそこにいた。……意味が分からん。

入れとも言っていないのに勝手にドスドスと部屋に入ってくる。

その顔は不機嫌そのもの。あの野郎一体何をしやがった。

「あーあっ！　もう！　一夏の奴信じらない！」

「はいはい、落ち着け落ち着け。アイツがああなのは今に始まったことじゃあねえだろうが。ほくら、お兄さんに何があったか話してみろよ」

と言うことで。

かくかくしかじか、まるまるうまうま。
つまり要約すると――。

「酢豚の誓いを一夏が忘れてたのか」

「桃園の誓いみたいというのやめなさいよっ！」

「ふむ。一夏の奴が酢豚の礼をわすれてた、と」

「三顧の礼みたく言うのも止めろっ！」

めんどくせえ奴だな。

人の部屋でパクパク人の食料むさぼりやがって。やけ食いか。その栄養が何で胸に行かないのかね？

黙ってみていると、落ち着いてきたのか俯き加減になってしまった。
これはこれで俺の方がいたたまれない。

「……やっぱり酔豚じゃ駄目だったのかな」

「まあ、直接的ではねえなあ」

「あるとき満漢全席にしておけば……」

「喰わされる方の身になれよ、惚けたこと言ってんじゃねえ」

んなもん毎日出されて堪るか。喰いきれねえよ。

それにコイツにも非がないとは言えない。一夏の性質的にそんな言葉
葉を掛けたところで額面通りに受け取るに決まっている。

理解が足りねえんだか、なんなんだか。

コイツらも苦勞するなあ、とそんな事を思いながら、俺は鈴に声を
掛けた。

「まあ、あれだ。拗れると後からめんどくせえし、早めに仲直りする
んだな」

「アイツが悪いのになんで私から謝んなきゃなんないのよ！」

……ふう。どいつもこいつもまあ、困ったもんだ。見守る方としてはハラハラしてしょうがない。

「いいか、鈴。昔っから言っただろうが。何事も速いことにはこのしたことがねえんだっつーの。アイツ倍率高いんだから、とろとろしてると持ってかれんぞ？」

「――うっ」

心当たりは大いにあるらしい。まあ、部屋で箒みてるんだし当然か。――っか、この話箒にもしたような気がするなあ。

とりあえず鈴を促して立たせて、部屋の出口まで押していく。

「ほれ、思い立ったら即時即決即行動。明日も早いんだから、さっさと戻れよ」

「でも……」

「いーから行けよ」

「……うん。話聞いてくれてありがと、直道」

「聞くだけならただだからな。解決ぐれえは自分でやれよ？」

しおらしい鈴なんてのは中々見たもんじゃねえが、まあさっさと仲直りしてくれるのを願うばかりだ。

鈴がとぼとぼと自分の部屋に戻っていくのを見送って俺は部屋に戻った。

ふう。思わず溜息が出るね。なんで人間って奴はこう、恋愛に関しては足が遅くなるのか。

「ま、人生色々あるわなあ……。これもまた文化……。か」

明日には解決してればいいがなあ。……一夏だし、期待するだけ無駄かも知れないが。

8. 『鈴は鳴らず、ただ地に墮ちる』 (後書き)

八。投下。

最近煙草が無くて駄目だ。

9. 『乱入・傍観』（前書き）

遅くなって申し訳ない。実家に帰ってて更新できなかったんだぜ！
と言うことで9話目。投下

9. 『乱入・傍観』

時は過ぎも過ぎて数週間後。

俺があれだけ親身になってアドバイスしたにも関わらず、鈴と一夏が仲直りした様子なぞ終ぞみられず、今日は既にクラス対抗戦当日と相成った。

いやいや、何でも一夏の奴、鈴に貧乳なんて言い放ったらしい。

俺も似たような言葉を洩らしはしたが、それでもそこまで直接的に言うなんて、流石一夏ソコに痺れる、懂れる。

貧乳に貧乳と言う勇氣。字面にすれば中々格好よさげではあるが、その実人の身体を貶めているだけである。

とまあ、人の逆鱗をやすりで擦り上げるような行為をした挙げ句、鈴にぶっ潰す宣言をされてしまったらしい。

自業自得此所に極まれり。話を聞いて一夏の尻を蹴り上げて、「一片死んでこい」と言った俺を誰が非難できようか。

何か不満そうだったので、一夏の股間に目をやって「粗末なもんだな」と言ってやった。

いや、まあ脱いではいねえんだけどな？ 見たくないし。

そしたら一夏の野郎、顔を真っ赤にして怒り始めやがったもんだ。そこで懇切丁寧に自分が鈴に同じようなことをしたんだっ—ことを説明してやれば、流石に反省したらしい。

今すぐ土下座でもせん勢いで、「俺はなんて酷いことを……！」な

んて頭を抱えていたのは記憶に新しい。

人間なんてもんは一生何かしらの身体的コンプレックスに悩む運命なんだ、結局。

此所まで個体差がある生物ってのは人間くらいだし、何より見た目なんてもんを気にするのは知性ある俺らだけっー話だ。

閑話休題。

で、次の日から鈴に謝る為の一夏君ストーキングが始まったわけだが、まあ取り付く島もありゃしない。

一夏が近づくだけで、自慢のツインテールを逆立てて警戒をあらわにする幼馴染み二号。そのツインテールどうなってるの？　ってな質問も受け付けてはもらえなかった。

いやあ、端から見ていると野良猫に触りたい少年と近づいてきて欲しくない野良猫の様相を呈してたな、ありゃ。

ついでについでに、箒もセシリアも自分の旦那が他の女の尻を追っかけ回してるんじゃない面白くない。

激化する日々の訓練。嵐のような斬撃と文字通り雨霞と吹きすさぶ青い光条はそりゃあ見物だったね。

まあ、相対的に浴びる一夏は檻糺雑巾もかくや、と言った有様ではあったが。

乙女の嫉妬とは斯くも恐ろしいものである。さもありなん。

俺としてもそれ以上のフォローをしてやる暇も気もなく、ほっとくままに今日ここまで来てしまったわけだ。

話は拗れ拗れて、メビウスの輪のように一回転して元の鞘に戻るこ
とさえなく、巡り巡って今日この頃。

さあ、一夏君は今日どんな地獄を見るのやら。俺の興味はそこに尽
きる。

今から始まるクラス対抗戦。スイーツなんぞにや微塵も興味はあり
やしないが、まあダチとしては頑張って貰いたい。
つーことで――。

「クラス対抗戦始まるよ」

「……本音、お前ナチュラルに人の肩の上に乗るんじゃないよ」

え？ 俺の下のサイズ？ 言わせんなよ恥ずかしい。

まあ、敢えて言うとするのなら、立浪ジョージも真っ青だけどな！

とまあ、そう言うわけで只今第二アリーナ観客席。

隣に嫁一号、四号を置いて、なぜか肩には呪いの装備『本音ちゃん』を装備して、俺は観客席へと座していた。

いやあ、壮観壮観。見渡せば溢れかえる人、人、人。

そりゃ、転入してきた代表候補生VS人類一人目の男性IS乗り。

話の種に此所まで相応しいもんも中々あるもんじゃあない。

二世代機対二世代機なんてしみったれた試合じゃなく、三世代機同士のカチンコ勝負。

国家クラスの興味を引く、一大カード。これくらいの客が集まるのは当たり前前ってもんである。

フィールドに佇む、白と赤。

鈴のISは『甲龍』（シェンロン）と言うらしい。

肩のスパイクを見る限り、願いなんて叶えてくれそうには無いが。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

見るからに殺る気——字が違った。やる気満々と言った雰囲気。鈴。

一夏もやっと覚悟を決めたような顔をしている。

鈴が試合前に最後の声を一夏に掛ける。

「一夏。一応言っとくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にもダメージを貫通させられる」

……おーおーおーおー、言うことが物騒じゃねえか。
つまり、鈴はこう言いたいわけだ。

『殺さないようにいたぶることは出来る』

中々いい具合に腑が煮えくり返っているようだ。
こりゃあ、一夏マジでヤバイかもしれないなあ。

——そして鳴り響く、死合開始のブザー。

「おおおおお！！」

一夏が雪片を鈴へと裂帛の気合いと共に振り下ろす。
が、それも鈴を真つ二つに切り裂くには至らない。

鈴の手に握られた青竜刀——両柄に刃がある——で、受け止められ
弾き飛ばされる。

そこから始まるのは台風のような猛攻。

そりゃもう、バトンか何かのようにクルクルと振り回される青竜刀
があらゆる角度から一夏へと迫っていく。

なんやかんやで捌いちゃいるが、それも時間の問題だろう。アイツ
も俺も端から受けに回るべきではない。やるなら最速で最高の一発

を決めるべきだった。

ペースを持ってかれたんじゃあ、死合の結末なんざ見えたも同然。しかしまあ、これで終わられたんじゃ酒の肴にもなりやしない、さてさて一夏君のお手並み拝見としようか。

すると一夏の奴も現状の不味さに気付いたのか、いったん距離を置こうと後ろへ下がろうとしたその時――。

――一夏が吹っ飛んだ。

「あ？ 何で吹っ飛んだんだ、一夏の奴。そう言うお年頃か？」

「あゝ。あるある」

「ねえよ」

「貴方たち、もうちょつと真面目な話は出来ませんか!?」

本音と馬鹿なやりとりをしている間にも死合いは淡々と続いていく。ボールか何かのようにポンポン吹き飛ばされ、地を転がる一夏。俺のように単純にスピードが速いなんて話じゃないことは確かだ。鈴は文字通り一步として動いてはいない。

まあ、肩のスパイクアーマーの中の珠が光っていることを見れば多

分絡線りはそこだろう。

「アレは――」

「『衝撃砲』だねー。空間自体に圧力を掛けて砲身を作って、で余って出来た衝撃を砲弾にして打ち出すんだ。第三世代型兵器なんだよ?」

「人の台詞を取らないでくれませんか!?!」

「中々成長したみたいだな、本音」

「うん。もつと褒めて」

「直道さんも褒める場面じゃないでしょう!?!」

「うるせえ、そのドリル引っこ抜くぞ」

「理不尽ですわ!?!」

オルコット。お前にはまだまだ速さがたりねえ。

それにしても砲身が見えない、ねえ……。

俺が試合を眺めていると、横の筈から声がかかった。

「直道、お前なら避けられるか？」

「へっ。避ける避けないなんてそんな話じゃ遅すぎるぜ、筈。そもそも狙いすらつけさせねえよ」

「そうか……」

聞いて置いて、返答は上の空。

旦那が心配なのは理解できるが、もう一人の幼馴染みをおざなりにするのはどうなのよ、筈ちゃん？

まあ、別段どうでも良いが。

と、ここで試合が動く。

一夏が加速体勢に入った。どうやら瞬間加速を使うつもりらしい。瞬間加速、なんて名前の割には一夏のそれは俺にとって酷く物足りないもんだが、初見の鈴には充分だったらしい。

迫る一夏とその刃が鈴を捉えたかと思ったその瞬間――。

――アリーナに響き渡る爆音。

舞い散る土埃。空から落ちてきたそれが何なのか、判別することは出来そうもない。

いきなりその中から迸る光条。

間違い無くそれは一夏達を標的とした殺意ある一撃。

連続して放たれるそれが、埃の幕を払っていく。そして現れる乱入者の姿。

俺と同じ全身装甲。しかしR・G・Sのような細身の形態ではない。肩と頭が一体化したような奇妙なボディ。

手が異様に長く、爪先よりも長く伸びたその姿は既存のISからは酷く逸脱している。

そして何より気にいらねえのが――。

「――あの糞IS、俺より早く乱入しやがっただとお……？」

「わゝ、なおちんより速いねゝ？」

肩の布仏に煽られるように、脚部限定でISを展開。とりあえず目の前の遮断シールドを思いっきり蹴りつける。

「ふざけんな、コラァ！ 開けーろーやー！」

「おおー？ 行け行け、なおちん」

「布仏さん、それ以上その人を煽らないでくださいませんか!？」

何度も蹴りつけてみるが、びくともしやしない。

完全にR・G・Sを身に纏い、『ALTER』を使えばぶち抜けるかも知れないが、こんな人の多いところで使えば、音速突破時の衝撃で辺りはあら不思議、目を覆うようなとんでもない惨状に。

流石の俺もミンチになった人間を見て悦に浸れるような下卑た精神はお持ちじゃないので、そればかりはやりたくない。

俺のそんな心境も無視して、目の前で戦いは進んでいく。

いつの間にか抱え上げてたはずの鈴を降ろして共闘してはいるが、戦闘状況としては思わしくない。

一夏の斬撃は躲され、鈴の衝撃砲は弾かれる。大体にしてもう残り少ないシールドエネルギー。自爆覚悟で大胆になんてのも冴えたやり方じゃないのは一目瞭然だ。

……しようがないか。

「ん？ 座っちゃうの、なおちん？ 助けに行かないの？」

「お前も何時まで人の上に乗ってやがる、本音。降りろや」

「ええ〜！」

いやいや、と首を振る本音を肩から降ろし隣に座らせる。

正直、このシールドがどうにかならない限り、俺にできることなんざ塵一つ分も存在しない。

こう言う又何だが、出遅れちまった以上俺は何もすることが出来ないわけだ。

「本当に助けに行かないの〜？」

隣の本音がそう問い掛ける。

しかしまあ、言う程乱入する意義を感じてる訳じゃない。

あそこにいるのは誰だ？ 一夏だ。

一夏とは何だ？ 俺の親友だ。

そう、その要素が、アイツという存在が存在する以上俺が必要以上に首をつっこむ必要なんざありやしねえ。

ま、本音は知らないわけだし教えてやるのもやぶさかじゃあないと俺は口を開いた。

そう、アイツは、一夏は――。

「――やる時はやる奴だ。心配なんざいらねえよ」

「……そつかあゝ♪　じゃあ大丈夫だね」

だろ？　一夏。

で、観戦タイム。

周りがロックされた扉に慌てふためく中、俺と本音はのんびんだらりと目の前で行われる戦闘を観戦し続けていた。

しかし、嫌になんか人間から外れた動きをするISである。

俺は最速を目指すに当たって、人間の人体力学を齧った経験があるのだがその知識と照らし合わせてみたところでこのISはおかしいと言いつける。

しかし、ISとは人間が乗らないと動かない……はずである。だが何処かの誰かが言っていたように、本来有り得ないなんてことは有り得ない。

人智なんぞ所詮人間が考え創り出したものなんか、超えられて当たり前だ。

人智を超えるのも又、人間であることに他ならねえ。

閑話休題。

それにやっとの事で気付いたのか、一夏と鈴は何事か話し出したようだ。

これは策でもあるだろうか。少しは期待できそうな感じがする。そう思いきや、あいつらが取ったのは一夏を鈴の衝撃砲で加速させ、無理矢理相手を真っ二つにすると言うともねえ荒技だった。

正直笑いが止まらない。

いやあ、しかし無茶も男の特権である。最後の一撃は中々の速さだった。

そう思いながらも、俺は立ち上がった。

生徒の避難が既に済んでいることを確認。R・G・Sを身に纏う。

周りの適当な物体をこれまた適当に分解。R・G・Sの背面から吹き出させる。

「褒めてやるぜ、一夏。しかしお前は――」

s
i
d
e

一
夏

『全く、ギリギリのタイミングでしたわよ?』

「セシリアなら出来ると思った」

何とか倒せた無人機にほっとしながら、俺はセシリアと軽口をたたき合っていた。

正直、セシリアの援護がなきゃと思うとゾツとする。

観客席を見てみれば、もう既に人っ子一人として存在していない。直道も逃げたのかな、なんてそんな事を考えていたら、いきなり白式に警告音が流れる。

『――敵ISの再起動を確認! 白式がロック!』

「――マジかよ!?!」

そう、俺は考えるべきだった。

無人機、つまり機械のみで更正されたそれは究極的に言えば死の概念など存在しない。

あるのは壊れたか、そうでないかだけ。

それなのに俺は何をやっていたのか。

完膚無きまでに破壊しない以上、それは動き出す可能性を秘めていたというのに――!

ああ、そうして無人機の方を急いで確認した俺に、無人機の腕に収束したエネルギーが見えた。

タイミング的に回避は不可。もうどうしようもない。

その今にも放たれんとしたエネルギーを見て俺は絶望し――。

「――詰めが甘えぞお？ 一夏」

――聞こえた親友の声で安堵した。

瞬間、ズドンと。

轟くような衝撃音と共に、無人機が逆側の壁まで吹っ飛び、そして沈黙する。

代わりに佇むのは、無人機と同じ全身装甲。

しかしあんなのとは違う、どこまでも人間めいた細身のフォルム。

先程まで無人機がいた位置へと足を突き出して、俺の親友が、直道がそこに立っていた。

「いいか、一夏。『ブツ倒す』なんて思うのはいいが、それで油断しちゃ世話がねえな。やるならしっかりかっさりぶっ壊してから油断しろよ？」

「……ああ、分かったよ」

「あ？ 何笑ってやがる。死ぬ寸前だったのに」

「いや、何でもない」

しかしそれでも苦笑を堪えることが俺にはできなかった。

隣のセシリアが妙なものでも見るような目を向けてくるが、それでもだ。

だってコイツ――。

「お前はホントに美味しいところだけ持って行くよなあ、直道？」

「ああん？ あったり前だろ、俺は最速だからな」

――本当にタイミングが良すぎる奴だ。

9. 『乱入・傍観』（後書き）

投下投下。

10. 『転人生来る』 (前書き)

十。ストックされた

10. 『転人生来る』

「――久我君、久我くーん。お部屋にいますかぁー？」

夜。部屋で本を読んでいた俺の耳にノックの音と、その主の声が届いた。

……全く、夜分遅くツツーわけじゃあないが俺の文化的時間を邪魔するとはふてえ野郎だ。

そう思いながら、読みかけの『善悪の彼岸』に棗を挟み、俺はかつたるそうに重い腰を上げるとドアの外の人間に声を掛けながら、扉を開いた。

「何だよ、真耶ちゃん。こんな時間に。もしかしてもしかするとデ―トのお誘いかい？」

「ち、ちちちちち違いますよぉ！　だ、大体、先生は先生なんだから先生って呼ばなきゃ駄目ですうー！」

何という三段論法。……違うか。

手を振り上げ、プンプンと擬音付きで怒る副担任を見下ろしながら、微塵も恐くねえなあとそんな失礼なことを考える。

しかし、一体何をしに来たのだろうか。速く用件を言って欲しいものだ。

あ、俺そっぴや晩飯喰ってねえや。

「あ、あのですね。ちょっと久我君にご相談がありましてえ……」

「嫌です」

「用件を聞く前に断るのは酷いと思います！」

「じゃあ聞いてあげるから速くしてくださいよ」

「あ、ありがとうございます。……あれ？ 私、教師……？」

……何で首傾げてるんだこの人。

時間が有限だと言うことを知らないのだろうか？ 此所で突っ立てる暇があれば本の一ページや二ページは軽いはずなんだがなあ。

うん、アレだ。もし知らないというのならそれを教えてやるべきだろう。

「先生、時間とは尊い物だとは思いませんか」

「はあ、そうですねえ」

「そう、時間！ 俺たちに限らず全ての物はそれに縛られていると言ってもいいでしょう。全く持って気に入らないが最速の俺もその軛から逃れることはまだ出来ません。そう、俺たちは決められたリミットの中で生きていかなければならない！ だったらそれを何よりも有効に使わなければならぬとは思いませんか？ 遅い事は何のアドバンテージにもなりません。既に決められた時間の中、タラタラと動いていては、やりたいこともやれず、出来る物も出来はしない！ 話は簡潔かつ端的に簡単に、行動は即時即決即実行！ そうすれば自分の希望を全て叶えつつ、更に他のことにも手を出す余裕さえ創り出すことが出来ます！ そう、時間に限ったことではありませんが物事をこなす上で、何より時間を有効に使う上で大切なのは何よりも速さ！ つまり速さこそが最高なのだと、そうは思いませんか山田先生！」

「そ、そうかもしれない！ だ、だったら私も用件を早く言わなくちゃいけませんね！」

「そう言うことです。ではどーぞ」

「一緒に住まわせてもらってもいいですか！」

ヤベエ。意味が分からん。

え？ 何、愛の告白なのか？ 一夏と違ってフラグを立てた覚えは微塵もないんだが。

くっ！ もしや俺が速さで真耶ちゃんに劣っているというのか！？ 許せん。そればかりは許せん。万が一にでも最速を自称する俺がこの人の説明を理解できていないと悟らせるわけにはいかない！

「ええ、いいですよ」

「あ、いいんですか。良かったですうー。じゃあ明日から来るので宜しく願いしますね？」

「はあ」

「あ、部屋を片付けておくようお願いしますね？」

「はあ。……こんななんですけど」

話の内容が良く理解できていないが、とりあえずこれは教師と生徒の禁断の関係フラグと思ってても宜しいのだろうか、諸君。
もげろ？ 聞こえんなあ。

と、部屋を片付けろと言われたので、ちょっと部屋の中を見せてみる。

安心してくれ、全国の紳士淑女諸君。俺の部屋には見られて困るようなアレなブツは今のところ皆無だ。

「部屋の私物化が半端無いです！？」

「まあ、自室ですしねー？」

「それにしたってこれは酷すぎます！」

真耶ちゃんに言われて自分の部屋を見回す。

所狭しと置かれた本棚。問題ない。中に詰まっているのは断じて思春期少年のバイブルではなく、漫画や小説その他色々。文化的生活と本は切り離せない関係なのだ。

え？ 漫画は文化的じゃあないって？ オイオイ、真耶ちゃん。漫画は日本の生み出した文化の中じゃあ最高峰の代物だろうが。

床に積まれた雑誌。主にバイクや車などの乗り物関係。うん。問題ない。

そしてそこかしこに散乱するDVD。スピード、タクシー、ゴーストライダー、スクライド。何も問題は無し。ゴーストライダーだけは完璧に外した映画だったが、まあどうでも良いだろう。

……何か問題があるのか？ いや無い。

「とりあえず明日までに片付けて置いてくださいね？」

「えー」

「片付けなきゃ駄目です！」

「はあ。まあ、了解です」

とりあえず飯でも食ってから片付けるか。

でも男子高校生の部屋ってこんなもんだよねあ？

と言う訳で食堂。

ビーフカレーを食堂のおばちゃんに貰い、ついでに「おのこしはゆるしまへんでー!」と有難い言葉を賜る。はて、此所は何時から忍術学園になったのだろうか。

空いている席を探していると、ふと周りから押し殺したような声が聞こえてくる。

「ねえ、聞いた?」

「聞いた聞いた!」

「え? 何の話?」

「だから、あの織斑君と久我君の話よ」

「いい話? 悪い話?」

「最上級にいい話!」

「聞く!」

……嫌に喧しいな。
妙に落ち着きがない学生諸君を傍目に辺りを見回すと、一夏と第一
婦人（箒）が飯と一緒に喰っているのが目に入る。
……邪魔をするのも忍びねえな。

「あ、なおちんだ。やつほ〜」

「ん？ ああ、本音じゃん。隣いいか？」

「お、久我君じゃん。一緒に夕食食べようぜー」

「げ、伍矛。……本音、お前友達は選べよ」

「――ああ！ 何その冷たい目！ ご褒美なの！？」

「死ねよ、伍矛」

「ああん！」

悶える伍矛（変態）を放って置いて、本音の隣に座る。
本音の前にあるのは普通の定食。伍矛のは俺と同じカレーなはずな

のだが、何だろう俺の目がおかしいのか？ 真っ赤なんだけど、これ。

いや、よく見ると大量の一味だ。辛党なのかコイツ？ 赤は赤でも三倍じゃきかなそうなレベルだ。

「辛い好きなのか？」

「知ってる、久我君？ 辛味って痛覚神経で感じるんだよ？」

「ああ、もういいや。喋んな」

「……ああ、放置も中々あ」

だから喋んなっつーの。

食事さえ快感に変えるとは……。伍矛、恐ろしい子。っーかとんでもない変態だなあ、コイツ。

とりあえず、一口ごとに身悶えする変態を眺めながら、俺もカレーをぱくつく。

此所の食堂の飯は結構レベルが高い。まあ、飯が不味いと気分も良くないからな。こういう所は助かる。

「あれ〜？ なおちんご飯は速くないんだね〜？」

「ああ？ ……ふう。お前は何か勘違いしているようだな、本音」

「え〜？」

「いいか？ 食事とは人の心を豊かにし、エネルギーと明日への活力を生み出してくれる行為だ。此所に速さは必要ない、味を堪能する為に歯で噛み砕いて食べ物を異へと流し込む……、そして——」

「私が言うのも何だけど、久我君も大概キャラ濃いよねー？」

「お前だけには言われたくねえよ！」

「あははは〜。二人とも仲良いね〜？」

「どこがだっ!？」

で、翌日。

とりあえず日課の早朝ランニングを済まし、一夏と一緒に教室内に入る。

カタログを持って談笑している。そういや今日スーツの申込日とか言ってたか？

俺は一夏と同じ所の奴使ってるから、頼む必要はないんだが。つかそもそも基本的に女子用のしかないし。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性に優れ、一般的な小口径

拳銃の銃弾程度なら完全に止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

……随分と長台詞を言いながら入ってきたな、真耶ちゃん。
そこはかとなく自慢げなのが何か可愛い。背伸びした小学生みたいな。

どうにもこの人は先生って感じがしない。

……現に今も生徒からつけられた八つ程の愛称を呼ばれて戸惑ってるっぽいし。

まあ、小っちゃいし仕方がねえか？

「諸君、おはよう」

教室が静まりかえる。

イヤイヤ、これぞ調教の成果だ。半端ないね、千冬さん。

「――ヒャン！」

イヤイヤ、半端ないね、伍矛さん。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それ

もないものは、まあ下着でかまわんだろう」

いや、下着は不味いだろう。アホか。

俺と一夏が存在を考えて発言して欲しい物である。

一夏のデリンジャーが制御不能になったらどうするつもりなんだ。

「妙なことを考えるな！」

「当たらんなあ」

「——ふあっ♪」

いい加減、織斑姉にも学習能力が欲しい物だ。

見ろよ、伍矛さんを。味を占めちまってるじゃないか。

もう手遅れなんだ、コイツは……！

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ。……ええとですね、今日は何と転校生を紹介します
！ しかも二名です！」

悶え狂う伍矛を無視して、普通に話を進める担任と副担任。いやあ、

遅しくなったなあ。

……つーか、学園の特性上他の国が多いのは分かるがそれでも転校生多すぎだろう。

鈴も合わせりゃあ既に三人転校してきたことになる。

多いな。インパクトが足りない。

転校生ってのは偶にいるから珍しいわけで、そんなホイホイ出てこられたらありがたみも薄れるだろ。常考。

と言う訳で大した期待をするでもなく、声を掛けられて開くドアを眺める。

いや、しかし次の瞬間には驚いたね。

何でって？ そりゃあ――。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、皆さん宜しくお願いします」

――転校生が男だからだ。

綺麗な金髪に、女にも見える中性的な甘いマスク。激甘。

礼儀正しさも相まってまるで何処かの貴公子を思わせるような完璧な所作だ。

俺は礼儀正しさなんてどうの昔に置いて来ちまったので羨ましい限りである。

……まあ、冗談だけど。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああっ！！！」

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもウチのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜〜〜！」

うるせえ。音波兵器か何か、おい。

ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー、喧しい女子を尻目にもう一人の転校生に俺は目を向ける。

第一印象としては小さい。鈴よりちみっこい。

腰まで流れるような長い髪は銀色。赤い瞳がまるで兎のようだと感じる。

何よりも異質なのはその雰囲気か。片方の目を覆う眼帯と、いかにも軍人然とした雰囲気がこの学園に死ぬ程そぐわない。

あと自己紹介する気が微塵も感じられない。何か喋れっつーの。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「此所ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、此所ではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

教官。まあ、教官は教官でも鬼教官であることに間違い無い。

ハートマン軍曹もビックリだ。

そう思いながら頭を軽く下げる。

後ろの奴がどうなったかは言うまでもない、つつーものだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……あの、以上ですか？」

「以上だ」

真耶ちゃん、無惨。

いや、俺は簡潔でいい自己紹介だと思うがな。

中々、見込みのありそうな奴じゃないか。うん。
と思っていたら、いつの間にか転校生ちゃんは一夏の奴の前に立っている。

結構不穏な空気を醸し出しちゃいるが、なんだよ一夏君。現地妻か何かか？ 手を出して逃げてきたのか、ええ？

まあ、友としちゃその振り上げられた手を黙って是とするわけにはいかない。

よし、君に決めた！

「――ああ！！」

「伍矛さんっ！？」

「――っ！？ 何だ、コイツは」

「ああ……！ 何か、目覚めちゃいそう……！」

アンタはもうとっくに手遅れだよ。

まあ、伍矛シールドを使う俺も大概人でなしだが。

しかし本人が望んでいるんだから致し方がない。これは必要な犠牲だったのだ……！

「ちょ、おま、直道。いくら何でもそりゃ無いだろ！」

「あ？ お前助けてやった親友にそりゃねーだろ」

「物理的に助けてくれたのは伍矛さんだし！」

「――貴様っ……！」

「あぁん？ 何だ、コラ。やんのか兎ちゃん。速いのは結構だが俺のダチに手え出しといてただで済むとおもってんのか？ 最速で沈めんぞ？」

睨み合う俺と転校生。

身長的にあっちが見上げる形だが、ふん。中々いい目をしてやがる。俺をぶっ殺してやろうかつー剣呑な眼だ。

……上等じゃねえか。

「あー、んんっ……、ではホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

……ちっ。白けた。

千冬さんの命令には嫌に素直な兎ちゃんも俺を一睨みしてから黙々と自分の席に戻って準備を始める。
となると、俺らもさっさと着替えなきゃならんな。今日は第二アリ

「ナの更衣室が空いてたはずだ。」

「織斑、久我。デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう」

「君達が織斑君と久我君？ 初めまして、僕は……」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替えるからな」

「だな。急ぐか」

そう言うのと、一夏がデュノアの手を取って走り始める。

色々と説明をしているようだが、何故かデュノアの顔が赤い。なんだ、どうした。もしかしてそっち系なのか？

……まあ、俺に直接被害がなきゃ別段性癖なんてどうでも良いが。

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と久我君と一緒！」

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会えい出会えい！」

馬鹿ばっかだ。乗りが良すぎると言うが。ゆとり教育の弊害。もしくは単に此所の生徒の頭が緩いだけかも知れん。と、そんな事を考えていたその時だった。いきなり一夏に足払いされ、体勢を崩す。

「てめえ！ 何しやがるこのバカ！」

「転校生に苦難を味あわせるわけにはいかないんだ！ 生け贄になつてくれ、直道！」

「ふざけんな、このボケ！」

言いつつ走り去る一夏。

取り残された俺。

く、クククク。あの野郎。ふざけた真似しくさりやがって……！
もうお目当ての転校生に逃げられたにも関わらずに、俺の所へと殺到しようとする女子を傍目に、俺はR・G・Sの脚部を限定展開した。

s i d e
一夏

くっ！ 親友を犠牲にするとは中々心苦しい物があるが、しょうがない。しょうがないことなんだ。直道は尊い犠牲になったのだ。

俺が後悔に沈んでいると、抱き上げて走っていたデュノアが遠慮がちに声を掛けてくる。

「あの、織斑君。良かったの？ 久我君にあんな事して」

「ん？ まあ、アイツなら大丈夫だろ。最速で逃げ出してるさ。それよりも織斑君じゃなくなつて一夏って呼んでくれよ。数少ない男子同士なんだしさ」

「うん。分かったよ。僕のことシャルルでいいよ」

「おう。よろしくな、シャルル」

悩みの共有できそうな男子が増えたことが嬉しくて、笑みを向けると何故かシャルルは赤くなった。風邪か？

うーん。見れば見る程男っぽくないなあ。なんつか、こう、抱いてる感じも柔らかい感じがするし。

と、ちよつと邪なことを考えていると、後ろから妙な音が聞こえてくる。

「いーちーかー！」

「げえ！ 直道い！？」

後ろから鬼のような形相をした直道が走ってきていた。

R・G・Sを脚部だけ展開している。おい、校則違反じゃないのか！？

「随分勝手な真似してくれたなあ！　しかも俺より速く逃げようとしている！　どっちかというと、後者の方が気にいらねえ！」

「わ、悪かった。ほら、今はシャルルも抱いてるし、手荒なこと話の方向で！」

「知るかっ！　寄越せ！」

「——きゃあ！」

シャルルを奪い取られた。

これで俺のアドバンテージは無し。この後待っているのは勿論——。

「死ね！」

「——ぶふう！？」

足払い後、浮き上がった俺を思いっきり地面に叩きつける直道。
手加減してくれてるのはギリギリ分かるがそれでもあんまりすぎる
だろう。

「ハハハハー！ デュノアは貰っていくぜ！ 精々遅れねえことだ
な、一夏あ！」

「え？ え？ ええゝ！？」

……そのまま、とんでもない速度で更衣室に向かっていく直道。
ああ、シャルルの断末魔の声が聞こえる……！

……ところで女子に囲まれた俺は次の授業に間に合うのだろうか。

「知るか」

10. 『転人生来る』 (後書き)

投下。

11. 『訓練とは名ばかりの苛め』 (前書き)

……どこもお久しぶりです。

11. 『訓練とは名ばかりの苛め』

アリーナ。更衣室。

突然だが、なんかヤバい。何がヤバいってヤバいやババ、マジヤバい。

現状、更衣室にいるのは俺とデュノアの二人なわけなのだが、何故だろうか。視線を感じる。

誰の視線かなんつつーのは勿論考察をするまでもなく、消去法でデュノアしかないこと

ぐらいガキでも分かるわけなのだが……。

視線がなんか腹筋を中心に下腹部辺りに集中している気がすんだよ。いやいやいやいや。んなわけねーよ、んなわけねー。

まさかデュノアがホで始まってモで終わる業界の人なんて有り得る訳ねーだろ？

いや、しかし美形に限ってそう言うことがあるとも聞くし……。

まあ、百歩譲ってデュノアの性癖はどうでも良いでしょう。しかし俺はノンケだ。

ノンケである。

ノンケなんだよ！

つまりケツを差し出す筋合いも、差し出される筋合いもないわけだし……。

「貴様ッ！ 見ているなッ!？」

「——ひう!？ みみみみみみ見てないよ!？」

とりあえず冗談で誤魔化そうとしてみたのだが、顔を紅く染め上げながら異様に取り乱した反応をされた。
逆に信憑性上げてどーすんだよ！

こ、ここは後から来るだろう一夏に任せて逃げるべきだろう。そりやもう最速で！

「デュノア、先行くぞ！」

「え？ ちょ、ま」

「一夏とでもゆっくり来いや。そんじゃ！」

一気に離脱。

当たり前だ。一般男子(?)である俺は菊を散らしに行く趣味は微塵もない。

そう言うのは一夏の役目だろ、常考。

『や、やっと着いた……ってエエ!？』

『——ッ!？ キャアアアアアア!——!』

！？ 後ろからやけに甲高い悲鳴が聞こえて来やがった。

一夏の野郎、もしや男子更衣室と間違えて、女子更衣室に突っ込みやがったのか？

だ、だがしかし男子更衣室に突っ込んでデュノアに突っ込まれるのよりは些かマシかも知れん……。

「いやいや、それはそれで良いんだけど、私としては織斑君のへたれ攻め、久我君の強気受けが至高だと思っただけ、どうかな？」

「テメエはいつから其処に居やがんだ、ええ？ ヘンタイ 伍弔さんよお？

っーか独白を読むんじゃねえよ！」

「知らないのかい、久我君？ やおいあるところに私ありという伝説を！」

「あ？ やおいって何だよ？」

「フッ、女子の嗜みさ。良い子はお父さんやお母さんに聞いちや駄目だぞっ☆ 怒られても知らないからねっ☆」

……どこ向いて喋ってやがるんだ、この変態。

っーか本気で走ってる訳じゃねえにしろ、俺と並走してやがるぞコイツ。

——生意気なっ！

「おおっ！？ 久我君のスピードが跳ね上がった。どーしたの！？」

「ついてくんじゃねえよ、変態ッ！」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてねえよ！ 照れんな！ 蹴り飛ばすぞ！？」

「マジでッ！？ お願いっ！」

——虫酸ダッシュ。

大変だ、変態だ。大変な変態だ。まじでどうしようもねえぞ、この女。虫酸が走ったわ。

逃げろ、風になれ、俺！

「……織斑とデュノアはどうした、久我」

「さあ？」

「……お前の足下にいるソレはどうしたんだ一体」

「さあ？ 知り、ません、ねえ」

「ああ……！ 私、今踏みにじられてる……！」

「なおちくん。さっちゃん踏んじゃダメだよ？」

良いんだよ、コレは踏んでも。

下でビクンビクンと震える変態を足で横に避ける。「えー、もう終わりいー？」などと文句が聞こえるがガン無視だ、死ね。

と、伍矛と寸劇を繰り広げていると、グラウンドの入り口から一夏とデュノアが走って来やがった。

……心なしが気不味そうな雰囲気。というか頬を染めて初々しい雰囲気といったところだろうか？

え？ もしかしてもしかすると禁断の薔薇の園に踏み出しちゃったのか？ おいおい、マジかよ？

「あ、直道！ お前のせいであ……って、なんで尻を押さえて離れるんだ？」

「いや、別に深い意味はねえぞ？」

「……じゃあちよつとこっち来いよ」

「やだね」

「なぜ?!」

「自分の胸に聞け、クソボケ！ 俺のバージンは奪わせねえぞ！」

「なにを言ってるんだ、お前は!？」

「……いつまで馬鹿をやっているのだ、貴様ら！」

「いてえ——!？」

「何故避ける、久我」

いや、遅えからですよ？ 一夏なら当然だが俺がそんな出席簿に当たってやる義理もねえってもんだ。

そもそも最速を自称する俺に攻撃を当てようってのが既におこがましい。いくら史上最強の女傑こと織斑姉であろうが、宇宙最速を自認するこの俺に攻撃を当てられるわけもない。

そもそも、そもそもだ。

——どんな強さにも通じる答え、それこそが速さだと俺は考えている。相手が攻撃するより速く攻撃すれば自分が傷つくことなく相手を倒すことができる。もし一撃で倒せなかったところで少なくとも先の先をとるというアドバンテージが発生する。先の後？ 後の先？ 後の後？ そんな遅い事なんぞ考える意味がねえ。相手が考えるより先に思考し、相手が行動に移すより先に行動し、相手が仕掛ける前に仕掛ける。最速であれば何もさせずに相手を倒すことすら

可能になる！　つまり最速と最強は違うようでいて同義なの――

「――随分ゆっくりでしたわね。スーツを着るだけでどうしてこんなに時間が掛かるのかしら？」

「邪魔すんじゃないよ、糞ドリルウ！　つーか誰がゆっくりだ、ぶっ飛ばすぞ！？」

「な、なんでわたくしが怒られてますの！？」

だ！　ぐらい言わせろや！　絶妙なところで邪魔しやがって、空気ぐらい読めよ！

俺に怒鳴られ狼狽えるオルコットを傍目に、遅れた理由を問い詰められる形になった一夏が、ちらりとシャルルの方を見る。

交わされる視線。顔を赤くして目を逸らす一夏。同じ色に顔を染めて恥ずかしげに俯くシャルル。……なんぞコレ。

「いや、今回は直道がだな……」

「おお、聞けよ、オルコット。一夏の野郎が廊下で伝説のお姫様だっこをかましやがってよお」

人に罪を擦り付けようとする一夏の台詞に被せるようにして密告してやる。

それを聞いた途端、オルコットの額に走る青筋、一転顔を青ざめさせる一夏、顔を更に真っ赤にするシャルル。うん、カオスだ。

ついでに言うなら後ろで聞き耳を立てている第一婦人（箒）からは修羅の如きオーラが出ている。

だが勿論俺は悪くねえ。俺より先に行こうとした一夏が悪いに決まっている。まあ、お姫様だっこされていたのは同性だがそこを明言する必要はないだろ。

「ええ、ええ、一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？」

「なに？　一夏の奴またなんかやったの？」

「ああ？　チビ鈴の声はすれども姿が見えねえ」

「此所にいるわよ！　アンタ分かっててやってんでしょ、直道！」

「おおっ。そこにいたのか、小さな巨人」

「ミクロマン！　ってやらせんじゃないわよ——避けんなあ！」

だから当たってやる道理はないと何度言えば分かるんだ、コイツは。鈴の放ったローキックを避けつつ、捕獲。脇に手を入れ持ち上げる。バタバタと手足を振り回すが、全弾見事に回避した俺に感嘆の意を覚えたのか疲れたように溜息をついて大人しくなった。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「うわっ、一夏。アンタって何でそうバカなの？ 死ぬの？」

そのまま会話に移行する鈴も随分と図太くなったもんだ。俺の教育の賜物だろう、きつと。

……まあ、楽しげ(?)に会話する分には俺は一向に構わねえんだが、コイツらもしや今が誰の授業か忘れてるんだろうか。

「――安心しろ。バカは私の目の前にも三名いる」

錆びたブリキ人形みてえにぎこちない動きで首を動かす鈴とオルコット。普通に振り向く俺。視線の先には、勿論我らが鬼教官、織斑姉。

振りかぶられる黒光りする出席簿。中々の速さを誇るその一撃に俺がとった行動は至極簡単なものだった。

「鈴バリアー！」

「――ちょ、ま、なお、アウツ！？」

「わ、私のポジションが！？ こ、コレが噂のNTR？」

黙れよ、伍矛。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はいっ!』

「くうっ……。何かというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……直道殺す直道殺す直道殺す……」

合同実習だから知らねえが、アホみてえな人数が一斉に返事を返す中、頭を擦りながらぶつぶつと呟くオルコットと鈴。

鈴からは思いつきり殺意の籠もった視線を向けられているような気がするが、恨まれる筋合いがない、遅いのが悪いだろ、常考。

……真後ろから何か恨めしげな視線を感じるが気のせいに違いはない。とりあえず視界の端にあった足を踏みにじってやったところ満足したようで、その視線はすぐになくなった。なんだ、ただの変態か。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――鳳！ オルコット！」

『ええっ！？』

「専用機持ちはすぐに始められるからな。さっさと前に出ろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「直道殺す……」

千冬さんに呼ばれて、ぶつぶつと何か呟きながら前に出る二人。

明らかにやる気なさげな、いや、一人は殺る気に満ち溢れていると言ってもいいわけだが。

まあ、ともかくそんな二人に小声で何かを言う織斑姉。それを聞いて急にやる気を出す二人。

何を言われたか知らんが、大方一夏絡みだろう。あの面子だとそれ以外考えらんねえ。

「それで相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「出てきなさい、直道い！ さっきと今までの借りをまとめて返して上げるわ！」

「わたくしの話聞いてますの！？」

「……慌てるなバカ共。対戦相手は——」

——キィィイン……。

あ？ 上から何か聞こえんぞ？

上を見上げると上空から迫るIS。なんだ、敵襲か？

そう思っていると、聞き覚えのある声がグラウンドに響いた。

「ああああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

「了解」

そりゃ、退けろと言われれば退くが。

そしてグラウンド中に轟く墜落音。地面に埋まったISとその操縦者、我らが副担任真耶ちゃん。

どうにも締まんねえ登場シーンだなあ、オイ。

「大丈夫かよ、真耶ちゃん」

「うう、ちゃんと先生って呼んでください、久我君。それにそれに退いてって確かに言いましたけどちょっとくらい受け止めるポーズをとってくれたって良いのに……」

いや、俺のR・G・Sにそんなことを期待されても困る。

速度特化機体だからあんまり勢いのついた重量物は受け止められん。

「な、何か失礼なことを考えませんでしたか、久我君？」

「いいえ」

「そ、そうですか。なら良いんですけど……」

なにか納得のいかなそうな表情で俺を見る真耶ちゃん。平然としら
を切る俺。

ずれた眼鏡を直す真耶ちゃんに怪我がないことを確認すると、千冬
さんが鈴とオルコットへと視線を向けた。

「さて、小娘共いつまで惚けている。山田先生の無事も確認したし、
さっさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で……？」

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ。こう見えて山田先生は元代表候補生だ。今のお前たちならすぐ負ける」

その言葉にかちんと来たのか、闘志を滾らせる二人。

まあ、熱くなるのは良いが頭の中はクールにいかねえと不味いんじゃないかねのか？

とまあ、俺の心配も知らずに戦闘が始まるのだった。

——少女戦闘中——

「瞬殺。んゝ、良い響きだ。そう思わねえか、本音」

「そうだねゝ、なおちゝん」

「……お前、ホントにそう思ってたのか？」

平常運転の本音に疑問を抱きつつ、言い合いを始めた鈴とオルコツトを見やる。

試合内容は心底しょぼく、ちよろく誘導されたチヨロコ——失敬、オルコツトが鈴と衝突。固まった二人に真耶ちゃんがグレネードを投擲して終了というしょうもない戦闘だった。

全く、俺の日々の教育が全然生きてないようだ。アイツらにや速さがたりねえ。

「さて、コレで諸君にもI S学園教員の実力は理解できただろう。

以後は敬意を持って接するように」

そりゃちよつとばかり無理な話ではなからうか。

真耶ちゃんに敬意を持って接するというのは中々難しいと思うんだが……。

本人あんなだし。

「専用機持ちは織斑、久我、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。……では久我を抜いて各グループに分かれて実習を行え。各グループリーダーは専用機持ちがやること、良いな？」

え？ なに、俺はぶられてんの？ 苛めか！

「千冬さん！ 俺は！？」

「そこで座っている」

「せめて納得のいく説明を！」

「まず一つに、貴様に任せては速さどうのこののでまともな訓練にならん。二つ目、まし上手くいったとして貴様のような生徒が増え
ては私が敵わん。故に黙ってじっとしている、良いな？」

「りよ、了解……」

……び、微妙に納得のいく説明をされちゃった。ぐうの音もでねえぞこりゃ。

つーかいくら何でも酷くねえか？　こういう小さなことから苛めが始まるんだぞ！

「大丈夫、なおちん？　私はなおちんを応援してるからね」

「……今はお前の優しさがいてえよ、本音」

体育座りする俺の頭を撫でる本音の手に、余計に物悲しさを感じさせられた。

11. 『訓練とは名ばかりの苛め』 (後書き)

どーも俺がスロウリイ、作者の黒条です。

遅れてもうしわけありませんでしたと言うことで十話投下です。

12. 『獣笑』(前書き)

十二話投下。

12. 『獣笑』

「……何だ、お前ら」

「何だとは何だよ、直道」

「何だとは何だよとは何なんだ、シャルル」

「何だとは何だよとは何なんだっていうのは何なんだろうね、一夏？」

「何だとは——」

「長えよ！ 一生ループする気か、テメェら！」

「直道が始めたんだろ！」

「ツツコミが遅えんだよ！ ボケッ放しか！ 良いか、ツツコミと
いうのは大切なものだ。話がだれるのを防ぎ、尚且つボケの解説も
してくれるという優れた代物、それには勿論速さも必要だ。相手の
ボケを即座に理解し、最適なツツコミを素早く判断し、話が止まる
前に最速で突っ込み笑いを誘う。人間関係に欠かせないものだと言
ってでもいいだろう。確かに失敗することもあるだろう。見当違いな
ツツコミをして場を白けさせることなんざままあることだ。しかし、
そこで止めちまえばそこからは進まない。何が悪かったのか最速で
考え、次に繋げる。そうすれば次のチャンスにはバッチリだ！ 人
のボケに即座に突っ込み笑いが取れる行事には欠かせない人気者に
なれるっつー寸法だ。そして何より語感が良い！ 突っ込む、それ
はどんな壁をもぶち破るという漢気、一番に前に出るという速さ、

そしてちよっぴりのエロスすら感じさせる最高の言葉だ。そう、つまりツツコミとは速さなのだ！」

「ね、ねえねえ、一夏。突っ込む、っていう言葉のどこにえっちなところがあるの？」

「んー、あー、その……。直道！ シャルに変な言葉を教えるんじゃない、ありません！」

「変な言葉とはなんだこの野郎！ つーかだから、なんでテメエらが荷物持参で雁首揃えて俺の部屋に来てんのかって聞いてんだよ！」

「山田先生に久我君と同室って言われたんだけど、聞いてない？」

「聞いて……。たような気がしないでもねえな」

……冒頭から一体何事かと問われりゃ、まあ簡単な話一足先に夕食を終えて部屋に戻ってきた俺の所にやって来た客が問題だった。訪れたのは一夏とデュノア。二人とも何故か荷物を持ってさも当たり前用の俺の部屋に入ってきたことが事の発端つつーわけ。

まあ、俺は遅まきながら事態を把握したわけだが。昨日真耶ちゃんが言ってたのはこういうことか。

ん？ 待て待て。『遅まきながら』、だと？ そんな如何にも遅い台詞を俺が自ら吐いちまうとはなんたる不覚！ 俺にもまだまだ速さが足りないと言うことか！？

「お、俺がslowly……?」

「く、久我君、大丈夫!？」

「気にすんなよ、シャル。どうせいつもの発作だ。……ってか部屋の私物化が半端さ過ぎるだろ、直道。汚いぞ」

「……うるせえ。ベッドは空いてんだろーが」

い、いやいや俺は遅くないはずだ。そもそも真耶ちゃんの説明が悪いんじゃないのか？

……いや、ちよつと待て俺。そんな考えで良いのか？

自分の遅さに言い訳して、他人の説明が悪いと文句を言う。それが最速の男だと言えるのか？

否、否だろう。それは。

俺が遅かった。言い訳はしねえ。遅いつつーのは速くなれねえって事じゃあねえ。俺にできるのはこの出来事を教訓に生かして、さらなる速さを目指すことだけ。

——だからっ！

「——俺はやるのだっ！」

「ひゃっ!？ え、何？ どうしたの、久我君？」

「ほっとけ、シャル。発作だ」

「そ、そうなんだ……」

あ？ コイツら、いつの間にか人の部屋で和んでやがる。

緑茶なんぞを仲睦まじそうに啜りやがって、夫婦か何か。

つーか緑茶どっからもって来やがった。俺は根っからの紅茶党だからこの部屋にはねえ筈だが態々持ってきたのか？

などとそんな事を考えながら、部屋の隅をこそごと漁る。

確かこの前ここに冗談で千冬さんに渡そうと思ってたもんがある筈なんだが……。

「ああ、あったあった」

「何やってんだよ、直道？」

「ほれ、一夏」

「……なんだ、コレ？」

「チラシ？」

見つけたチラシを見た一夏とデュノアが怪訝そうな視線で俺を見る。全く無知はコレだから困る。もうちょっと社会情勢なんかを勉強して欲しいもんだ。千冬さんの弟ならコレくらい一発で看破して然るべきだろう。

まあ、このバカにそんな事を言っても始まらないことも知っている。

懇切丁寧に説明してやろうじゃねえか。

「オランダ旅行のチラシ」

「何でだよ」

「いや、暮らす前に見に行っという方が良いだろう？」

「なんで俺がオランダで暮らすことになってんだ!？」

「同性結婚ならそこが一番条件が良いはずだぜ！」

サムズアップ。俺は同性愛にも寛容な男だ。俺を巻き込まなければ
な。

そこら辺の理解の早さも最速だ。

「何で俺が同性結婚するんだよ!？」

「……えっ？」

「なんで不思議そうな顔をしてシャルを見る？」

いや、いつの間にか愛称呼びだし、てつきり。
しかしデュノアの方は赤い顔して俯いてるぞ。全く同性にすら最速
でフラグを立てるようになるとは、見上げた野郎だ。

「ま、まあ、いい。で一緒に暮らすに当たって色々決めなきゃいけないと思うんだけど、風呂の順番とか色々」

「あ、僕が後で良いよ。久我君と一夏が先に使って」

「あ、そっか。シャルはそうだよな。それでいいか、直道？」

「俺が先なら後は勝手にしてくれ。つーか一緒に入れば、お前ら？」

「ななななな、何言ってるんだ、直道！」

「そそそそそ、そうだよ、ダメだよ！」

手間も省けるし。時間も少なくて済むだろ。もう遠慮も何もねえだろうし。

そう思った発言だったのだが、顔を真っ赤にした二人に反論された。何故だ。今更隠すところなんざねえだろうに。

「ベッドはもう一個あるからデュノアが使えるよ。ただし一夏、テメーは駄目だ」

「じゃあどこで寝ろって言うんだよ」

「寝袋でも使っとけ。それともデュノアと一緒に寝るか？ 夜中煩くしなきゃそれでも良いぞ？」

「ななななな、何言ってるんだ、直道！」

「そそそそそ、そうだよ、ダメだよ！」

台詞を使い回すな。手抜きか、コラ。

「そ、そう言えば一夏はいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「あ、ああ。俺はみんなから遅れてるから、そうでもしなきゃ、な」

「久我君は？」

「ああ、コイツはもう馴れちゃったみたいだな。あんまり参加しないんだ。大体外で走り込みしてるよ」

「ふつ。俺は適応能力すら最速だ」

「あ、あはは……」

分かりやすく話を逸らしたデュノア。それに乗っかる一夏。逃げ足だけはそれなりだ。嘆かわしい。

一夏の特訓の件だが、生憎俺はあんまり参加していない。他人の恋路に首を突っ込む程野暮じゃあないってだけだが。

それにR・G・Sで特訓つったて教わることなんざ殆どありやしねえ。体捌きと速度になれちまえば後は本人次第だし。

「僕も加わって良いかな？ 何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「おお、そりゃありがたいな。お願いするよ、シャル」

「話は纏まったか？ 俺はもう寝るぞ」

「ああ、お休み。直道」

「お休み。久我君」

「直道で良いぜ、デユノア。ルームメイトだしな」

「うん、分かった。僕のことシャルって呼んで？」

「あいよ。そんじゃお休み、シャル、一夏。良い夢見ろよ？」

……全く目の前でいちゃいちゃされると堪ったもんじゃない。

何か口から砂糖かメープルシロップでもぶち撒けそうな雰囲気醸し出す二人から逃げるため、俺は先に床につくことにした。

ちなみにその日は夜に妙な声が聞こえたりはしませんでした、まる。

「こう、がーっと行って、しゅん！ すぱっ！ という感じだ」

「何となく分かるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ 何で分からないのよバカ」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度回転ですわ」

「ああ、分かった。お前ら馬鹿なんだろ。そうだろ？」

「ぜ、全然分からん……」

「あ、あはは……」

今の説明で何が分かるのか、逆にご教授いただきたいような有様である。

シヤルと兎ちゃんが転校してきてから早五日。アリーナ使い放題の土曜日である今日は絶好の特訓日より。

一夏とコイツらの訓練に参加するのは実質初めてなのだが、一夏がどんな教え方をされているのか興味が湧いたので来てみた。結果はこんなものである。どうしようもねーわ、コイツら。

鈴と箒は感覚的すぎ。オルコットは細かすぎ。絶望的な難解さだ。人にモノ教えんの向いてねーわ。一夏も可哀想に。

「なんで分かん！ だから、ぎゅんっ！ ばしゅっ！ どんっ！
という感じでだな――」

「ちゃんと聞きなさいよ！ いい？ 要は感覚なんだから――」

「もう一度説明しますわよ！ 防御の時は右半身を斜め上前方へ――」

「だあー！ うるせえぞ！？」

「い、一夏、あっちで僕と模擬戦でもしてよっか？」

「ああ、そうしよう……」

あ、一夏が愛人と逃走しやがった。どう收拾つけんだよ、これ。
というより、コイツらホントに教える気あんのか？ そうだとした
らセンスがねえよ。せめて分かりやすく噛み砕けや。

「おい、ちゃんと聞け。直道」

「ちょっとちゃんと聞きなさいよ、直道」

「しっかり聞いているんですの、直道さん」

「いつから矛先が俺にっ！？」

に、逃げ損ねた。

俺が一夏に出遅れた？ 俺がslowly？

おいおい、待て待て。冗談じゃね一ぞ。こんな毒にはなっても薬に
なんざ微塵も進化し無さそうな説明を受けろと言うのか？

OK。上等じゃねえか。逆に俺が人に教えるという行為がどうい
うモノか、コイツらに享受してやろう。本音を本格的に調教……ゲフ
ンゲフン、教育する前にコイツらで肩慣らしだ。

「テメェら、そこに正座あ！！」

『ひう！？』

「さっさと座れ、このアホ共！！」

『は、はいい！』

「よし、座ったな。良いか、そもそも人にモノを教えると言うこと
は人に道を示すのと同義だ。だからこそ教育する方の人間は責任を
持たなければいけない。どの道をどう進めば最速でそこに辿り着く
のか、どう勉強すればその事柄が速く理解できるのか、どうすれば
最高の結果を最速で出すことができるのか。それを短い時間の中、
どれだけ分かりやすく素早く丁寧に教えられるかこそが教育者の本
分。つまりテメェらには速さが足りていない。遅い事なら誰でもで
きる。どんな馬鹿だって十年も勉強すりゃ東大だってどうにかなる。
そもそも速さというのは――」

「い、一体何があった」

『ハヤササイコー!』

「これぞ、ビバ! ビバ! ビバ! ビバ・ノウレッジ!」

「な、直道くん。『ビバ』はイタリア語で『ノウレッジ』は英語だよ……?」

『——ハッ!? 私たちは一体何を!?』

「ちっ。洗脳が解けたか」

「直道、お前友達を洗脳するなよ」

「……えっ？」

「不思議そうな顔をするんじゃない！」

いや、お前。友達だからこそ速さの素晴らしさを説いてやったんだろ。洗脳なんてそんな物騒なことを言わないでもらいてえもんだな。感謝されこそすれ、怒られる謂われはないんだが。……もう少しで洗脳もとい教育が終わるはずだったのに妙なタイミングで帰って来やがって。

「で？ どうだったよ。模擬戦は」

「……惨敗」

「……プツ」

「笑ったな！？ 表に出ろ、この野郎！」

「上等じゃねえか、やれるもんならやってみな。つーかここは既に表だ、馬鹿野郎」

睨み合う俺と一夏。

アリーナの中がざわめきたつ。しかしどうやらそれは俺たちに向けられているのでは無いようだった。

アリーナ内の視線を集める何かの方向を向けば、そこにいたのは『黒』だった。

左肩に巨大な砲身を装備した、漆黒のカラーリングのIS。それに乗るのはもう一人の転校生。兎ちゃんことラウラ・ボーデヴィツヒ。

「おい」

「……何だよ」

そのまま俺たちの方に近づいてきたボーデヴィツヒがオープン・チヤネルで一夏に話しかける。

中々に剣呑な声色。まあ、転校初日から一夏に対してコイツが何か悪感情を持っていたことなど分かりきったことだ。だが、いったい何だ？ 何がコイツをそこまでさせる？

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

何を言うかと思えば、心底下らない。あまりの下らなさに溜息すら出るね。

大会二連覇の偉業？ それがどうした。それは家族より優先される

べきモノなのか？ たった一人の肉親を犠牲にしてまで得るものがたかがそんなもん？

その話なら確かに俺も前に聞いた。だがそれで一夏が悪いのか？ ただのガキだったコイツに何ができる？ 恨むべきは一夏を攫った組織であって、こいつ自身じゃ決してない。逆恨みも良いとこだ。

しかしだからこそコイツは退かないだろう。俺にも分かる。心酔するものを穢されて怒るってのは俺もだからだ。ま、ここまで理不尽じゃあ話は別だが。

誰にも気付かれないようにR・G・Sを脚部限定で展開する。闘争の幕開けはすぐそこだ。

「また今度な」

「ふん。ならば戦わざるを得ないようにしてやるっ——！？」

ボーデヴィツヒがISを戦闘状態にシフト。肩に備え付けられた砲身が火を噴く——その瞬間に俺の蹴りがボーデヴィツヒへと突き刺さる。

その衝撃で逸れた砲弾は、一夏からまるで見当違いの方向へ向かい着弾。盛大に抉れた地面がその威力を周囲に知らしめた。

「——貴様っ！」

「——ハッ！ 前にも言っただろ？ 喧嘩っ早いのは結構だがなあ、

俺のダチに手え出しやがったからにゃあ——最速で沈みやがれ！」

蹴り足とは逆の足でボーデヴィツヒの機体を足場に跳躍。着地しながらR・G・Sを身体に纏う。

思考は最速。一瞬で周囲の物質を分解、吸収。グラウンドに幾つものクレーターができる。放つは単一仕様能力『ALTER』の力を上乗せした最速の一撃。

「——衝撃のファーストブリット！」

「——ふん」

——当たった。そう思った瞬間だった。

ボーデヴィツヒの前でいきなり停止するR・G・S。もしかコレは——！？

「A I C （慣性停止結界）。貴様のその機体にも一部の技術が流用されているらしいが、まさか自分が使われるとは思ってもいなかったのか？ やはり愚図の友人は同じく愚図のようだな」

「デメエ……！」

嘲るようなボーデヴィツヒの言葉に頭が沸騰する。

しかし、どれだけ力を入れようが俺のR・G・Sは動かない。

ボーデヴィツヒは更に嘲りの色を強くして、小馬鹿にしたような口

調で俺に話しかける。

「ふん。所詮、速度特化機体などと謳った所でこんなものだ。止められてしまえばなんの意味もない。武器もなしでこのシュヴァルツエア・レーゲンに勝てるとも思っていたのか？　こんな脳天気な国の一学生が考えそうなことだ。そう言えば、貴様は速さに拘っているという情報だったな？」

更に笑みが深くなる。

この尼、その先を口にする気か。

「――その結果がコレだ。速さだけには何の意味もないということが分かったか？　所詮速さなんてものは力の付属品だ！」

「――テメエエエエエツ！！」

「直道っ！？」

肩の砲身がこちらを向く。どうやらこのまま一撃をぶち込んでくれるつもりらしい。

ここで終わるのか？　ふざけるな。ふざけるな、ふざけるな。ふざけんじゃねえ！

あの男を、速さを馬鹿にされて、俺が、この俺がここで終わって言い訳がねえだろ！

しかし、そんな俺の心情も解せずにその砲口は俺を射貫くための弾丸を吐き出そうとして――。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

——スピーカーから流れ出た怒声で止まった。騒ぎを聞きつけた職員がやって来たようだった。

そのままA I Cが解除され、俺は地に堕ちる。ボーデヴィツヒは興が削がれたような顔でI Sを解除した。

「……ふん。今日は退こう。次は無いと思え」

そう言ってボーデヴィツヒはゲートへと引き返していく。

一夏たちがこちらに駆け寄ってくるのを目の端で捉える。しかし今の俺には一夏たちに答えることすらできなかった。何故なら——。

「大丈夫か、直道!？」

ラウラがアリーナから去って直ぐに、俺や箒たちは直道に駆け寄った。

口々に全員が心配そうに声を掛けるが、直道はたっただま俯いてこちらに反応を返さない。もしかして何処かに怪我でもしたのだろうか。

「……の……あ……れ……たな」

「え？」

身体を震わせる直道から声が漏れる。だが何を言っているのか聞き取れない。

そんな中、スピーカーから怒声を放ったであろう職員がこちらに駆けってくるのが見えた。

「おい、その男子! お前にも事情を聞くからちよつとこっちに――ヒィ!？」

「あの尼、この俺を止めさせたなァ!！」

声を荒げた職員の口から、一転悲鳴が漏れ出る。
鬼か何かのように恐ろしい形相を浮かべた直道が、アリーナに響くような怒声を上げる。

……あー、ヤバい。切れてる。

後ろからも鈴の「……うわあ、ヤバ」という声が聞こえてきた。そう言えば中学での惨劇を知ってるのは鈴くらいだ。

「……一夏あ」

「お、おう」

まるで地の底を這うような直道の低い声に、自然背筋が伸びる。
こうなったら逆らってはいけないと知っているのは、俺と鈴と弾くらいだ。

ま、マジでやばいぞ？

「テメエもあの屁に思うところがあるのは分かってるつもりだが、手え出すんじゃねえぞ？　いくら親友とは言え、手を出すつーなら、俺を止めるつーんなら容赦なくぶちのめす」

「おい、直道！　なんだその言い方は！」

「そうですわ！　一夏さんは貴方を心配して――」

「いや、良いんだ。分かった、直道。俺は手を出さない」

「だが、一夏――！」

「あー、箒、止めなさい。ああなったら何言おうが無駄よ」

何か言いたげな箒の台詞を、鈴が止める。

……たしかにああなった直道に何を言おうが無駄だ。そんな事は俺が、俺たちが一番分かっている。

「……どういふことですか、鈴さん？」

「……うん。その前に一夏、直道が切れたのってあれからは？」

「無いな。っていうよりあの一件以来、直道に向かって速さを馬鹿にしたような事を言う奴は一人もいなくなった」

「あー……」

「どういふことだ、一夏」

箒の問い詰めるような視線に、俺と鈴は顔を見合わせ、その事件の説明をすることにした。

事の発端は中学一年の夏。それなりに学校にも慣れ、アホな遊びもできるようになってきた頃だった。

直道は常にあんな感じだから、何というか目立つ。人の話はあんまり聞かず、我が道しか行かないウルトラマイペース。挙げ句ところ構わず速さについて語り出すような付き合いのない奴から見れば変

な人間だ。

勿論、そんな奴が上級生の目につかないわけもない。いくら俺たちが通っていたのが普通の学校とは言え、やはりどこにでも不良というものは存在する。

直道はそんな奴らに目をつけられた。

最初は別に良かった。直道はいちいちそんな奴らを相手にするような人間じゃあないし、面倒臭いことになりそうな時には最速で逃げ出していた。

だが、そんな直道に業を煮やしたその不良共は直道に逃げられないように、何処から集めた仲間を使って直道を捕まえた。まあ、俗に言う人海戦術だ。

「と、まあそこまでは別に良かったんだけどな。直道も最初は適当に隙を見つけて逃げるつもりだったらしいし」

「ど、どうなったんですの？」

「いやあ、ね。そんな中の一人が言っちゃったらしいのよ。『速さなんてくだらねえ』とか『速さに意味なんかねえ』とか。……アイツ、速さに関してだけは沸点が液体酸素より低いからね。もともと喧嘩は割と強いし、特に蹴りが」

いやもう、後はご想像の通りだ。

不良は直道を見た瞬間、最速で視界から消え失せ、逃げきれなかった奴は最速で土下座に移行する。

なにやら近くで見ていた弾曰く『あれは地獄絵図だった……』とい

う話。

「……昔の話を掘り起こしてんじゃねえよ。ありゃ若気の至りツツ
―奴だ」

「ふおう!？」

「何ビビってんだよ」

こそこそと話していたら、いつの間にやら直道が後ろに来ていた。
ビククリして声を上げる俺に苦笑している。もしかしてあんまり怒
ってないのか？

「まあ、いい。一夏、本当に手え出すんじゃねえぞ」

そう言って、そのままアリーナの外に向かい歩いて行こうとする直
道。

静かに見送る俺たちに向かい、もう一度振り向く。

その顔に浮かぶのはまるで、獣の様な笑み。眼光は刀のような剣呑
な鋭さを宿している。

あ、やっぱり切れてる。

その顔に身震いする俺たちに、直道が言葉を投げかけた。

「――アイツは、俺の獲物だ」

12. 『獣笑』（後書き）

日刊ランキング11位になってびびった。
次も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3781s/>

I S － R ・ G ・ S －

2011年10月24日03時14分発行